

Title	在「満州」日本人商工業者の衰退過程：1921年大連商業会議所会員分析
Sub Title	Decline of Japanese medium and small-sized enterprises in 'Manchuria': a historical analysis on the members of Dairen chamber of commerce and industry in 1921
Author	柳沢, 遊
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1999
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.92, No.1 (1999. 4) ,p.47- 80
JaLC DOI	10.14991/001.19990401-0047
Abstract	
Notes	小特集：経済史シンポジウム：経済史における「停滞」と「没落」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19990401-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

在「満州」日本人商工業者の衰退過程

——1921年大連商業会議所会員分析——

柳 沢 遊

1. はじめに

本稿は、1920年代の在大連日本人商工業者の経営的衰退過程とその論理を、大連商業会議所会員の動向を手がかりに考案するものである。

第1次大戦期（1910年代後半期）に、関東州を含む「満州」（以下カッコを省略）への直接投資が急増し、未曾有の企業ブームがもたらされたことは、周知の事実である。とりわけ戦後ブーム期に多くの企業が相次いで設立され、1918年に336社であった「満州」会社数は、1920年には、816社に急増した⁽¹⁾。関東州においても、1919年に224社、1920年に142社の株式会社が新設された⁽²⁾。筆者はかつて、こうした大連企業ブームのメカニズムとその中心的担い手について、大連商業会議所の役員層の動向に焦点をあてて考案したことがある⁽³⁾。すなわち、これらの企業ブームの中心に位置したのが、日露戦争期から第1次大戦期にかけて事業を発展させた、在満「地場」日本人企業家であり、とりわけ、石本鎖太郎、相生由太郎をふくめた10人程度の有力な政商的企業家が、大連商業会議所常議員会、大連市会などを拠点に「相互協力」を行いつつ新設会社の取締役や株主に就任していったことを前稿で明らかにした。

本稿では、前稿をうけて、戦後ブーム期に大連日本人経済界に参入した日本人商工業者の営業が、1920年恐慌後にどのような推移をたどったのかを、大連商業会議所の会員レベルに視野を広げて考察するものである。こうした試みにより、大連政財界上層部のみならず、日本人商工業者の上層・中堅層にとって、1920年恐慌がいかなる意味をもっていたかを展望することに、本稿のねらいが

-
- (1) 金子文夫「資本輸出と植民地」（大石嘉一郎編『日本帝国主義史 ①第一次大戦期』東京大学出版会、1985年）、356頁。
(2) 満鉄庶務部調査課『満蒙における日本の投資状態』1928年、80頁。
(3) 柳沢遊「大連商業会議所常議員の構成と活動——1910～1920年代大連財界変遷史——」（大石嘉一郎編『戦間期日本の対外経済関係』日本経済評論社、1992年）。

[第1表] 1921年7月大連商業会議所会員構成

業種名	会員(会社)数	1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級	8級	9級	10級
貿易商	44	2	1	4	5	1	3	7	10	8	3
卸小売商	118	0	0	1	0	4	8	16	36	20	33
銀行業	11(*1)	2	1	2	2	1	0	1	1	0	0
土木建築請負業 (各種請負業, 建材商含む)	28	0	1	0	0	1	4	6	9	1	6
製造業	44	0	1	4	1	3	4	3	15	4	9
出版業・印刷業	6	0	0	0	0	0	0	2	2	1	1
小口金融(質屋・両替含む)	10	0	0	0	1	2	0	1	5	0	1
取引所取引人, 信託業 仲介委託販売	15	0	3	0	1	0	1	4	6	0	0
その他(不動産, 生命保険, 貸 家業, 各種サービス業など)	12	1	0	0	1	0	3	0	4	0	3
鉱業	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
運送業・倉庫業	25	0	2	0	1	2	6	4	7	0	3
計	316	5	9	11	12	15	29	44	95	34	61

(注) (1) 上記会員316のうち, 32会員は, 15人の個人企業家の関与したものである(石本鑽太郎・野津孝次郎は, 3社に関与, 残りの13人は2社)。個人の会員数は299人。

(2) *1……「東華銀行支店土井和一」は, 等級不明により, 「1級」から「10級」までの合計数(10人)より1人多い合計となる。

(出典) 大連商業会議所『大正9年度大連商業会議所事務報告』1921年7月, 96~118頁より作成。

ある。

大連日本人経済界の発展をうけて, 大連商業会議所の会員数は, 175名(1916年)から241名(1918年3月)に, さらに1920年3月には349名⁽⁴⁾を数えた。1920年恐慌後の1921年7月の大連商業会議所の会員分布は, [第1表]のとおりである。全会員数316人の中で, 118人が「卸小売商」であり, その大半が, 5級から10級に属していた。この316人の中から, 日本国内の大企業支店長・出張所長41人をのぞき大連に本店を有する商工業者を抽出し, 判明する限りでの1920年代の営業税額のデータを記入したのが, 本稿末尾の付表「1921年6月大連商業会議所会員」である。この付表の納税額数値をもとに, 他の記述資料を参考にしながら1921年の大連商業会議所の会員の営業動向を,

(4) 同上, 320頁。

(I)「発展型」、(II)「現状維持型」、(III)「業績悪化型」、(IV)「閉店・休業型」の4タイプに分け、このうちとくに(III)と(IV)の2つのタイプの動向をたちいて検討することにより、大連日本人商工業者の衰退過程の特質を究明していきたい。

2. 日本人商工業者の衰退

(1) 大連商工会議所の役員動向概観

まず、付表「1921年6月大連商業会議所会員」の作成方法を簡単に述べておこう。(I)「発展型」、(II)「現状維持型」、(III)「業績悪化型」、(IV)「閉店・休業型」の4タイプを検出するために、①大連商工名録編纂所『大正九年大連商工名録』に掲載されている営業税額と、②大阪福岡帝國商工会編纂『昭和5年版帝國商工録』および③『昭和5年版大日本商工録〈関東州〉』の営業税額を会員ごとに比較し、①に比べて、②ないし③の営業税額が上昇している営業者を、(I)「発展型」とし、逆に①に比べて、②ないし③の営業税額が大きく減少している営業者を(III)「業績悪化型」とした⁽⁵⁾。また、1920年から1930年にかけて、営業税の推移が、あまり大きな変動を示さないものを(II)「現状維持型」とした。ただし、①『大正九年大連商工名録』には、「貸家業」をはじめとする同一営業者の業種別営業税額が判明するに対し、②③のデータには業種別の営業税額は記入されていないため、①と②ないし③との比較にあたっては、商工会議所名簿に記載されている営業科目を中心とした主要収入源の営業種類の営業税額の推移を、(I)(II)(III)の類型化の基準とした。また、①『大正九年大連商工名録』に、営業者・営業税額が記載されているにもかかわらず、②③にその営業者名が記載されていない営業者が84人にのぼった。これらの営業者の大半は、(IV)「閉店・休業型」に属すると推定されるが、②については「販売額2000円以上」、③については「営業税50円以上」の営業者を対象としているため、小規模ながら営業を継続している可能性も排除できない。そこで④『大正15年大日本商工録』、⑤交詢社『大正十二年用日本紳士録』、⑥松坂甫編『満州商工事情並紳士録』1927年、などを用いて、1920年後半期の営業活動の存否、営業規模などについて補足的な情報把握を行うとともに、1925年時の大連商業会議所会員名簿によって、21年時会員の異動状況、等級変化を確認した。こうして作成されたのが本稿末尾の付表である。

この表により、(I)「発展型」営業者は、103人、(II)「現状維持型」営業者は、41人、(III)「業績悪化型」(事業規模縮小型)営業者は41人、(IV)「閉店・休業型」営業者は、73人であること

(5) 営業税額の上昇が、ただちに商工業経営の業績向上を意味するとは限らないことはいうまでもない。したがって、ここでの(I)タイプの営業者の中には、売上金額の拡大を示しながらも、負債をかかえる企業家が少なからず含まれていることに留意すべきであろう。また、複数企業を商業会議所会員にしている企業家が15名存在するので、本来であれば、企業の盛衰と、企業家の盛衰を分けて考察すべきであるが、今回は、企業家の営業動向を判断の基準とした。

が判明した。末尾付表によれば、1921年に商業会議所会員でありながら、1925年に退会している営業者は118人にのぼった。このうち、42人がI型ないしII型に属しているから、実際には、I型、II型の中にも、営業成績の芳しくない営業者が少なからず含まれている可能性があるが、今回は、あくまで営業税額を基準に、上記の4タイプに分類したことに留意しておきたい。本稿では、このうち、III型とIV型の営業者に焦点をあて、彼らが業績悪化や閉店・休業に陥る過程およびその諸要因に接近してみよう。

(2) 「好況期多企業投資型」実業家

(III) 「業績悪化型」営業者と (IV) 「閉店・休業型」営業者114人を、1910年代から20年代にかけての営業動向を基準として、さらに分類すると、(a) 「好況期多企業投資型」企業家、(b) 「本業業績低迷型」営業者、(c) 「業種転換」営業者、(d) 日本本国への帰国推定者、(e) 「事業休止」営業者の5つのタイプが検出される。以下、それぞれのタイプについて、営業動向に関する記述資料を手がかりに、業績悪化・事業休止に至る過程をみていこう。

まず、(a) 「好況期多企業投資型」実業家は、1910年代末の企業ブーム期に、本業以外に複数の企業の設立に関与し、その会社役員や株主に就任した。しかし、こうした新設企業の大半が1920年代前半に、休業・閉鎖・解散に追い込まれるか、事業縮小・資本金減資を余儀なくされた。[第2表]は、(a)の実業家21人の中で、1910年代末に関与した企業が判明する企業家について抽出したものである。このうち、石本鎮太郎・野津孝次郎・小島鉦太郎・有賀定吉・川上賢三・河辺勝・古財治八⁽⁶⁾については、「政商的企業家」型大連商業会議所常議員の典型的事例としてかって考察したので、ここでは、それ以外の企業家の営業動向をみてみよう。

遠藤裕太（為替仲立業）は、東京市陸軍用達商遠藤万兵衛の次男として1868年に生まれ、1881年に三井物産横浜支店に小童として入社し、各支店勤務ののち、奉天・長春の三井物産支店主任を歴任して1909年に退社した。1910年4月満鉄社員日用品調弁所（満鉄消費組合の前身）に入所し同年12月に同所主任となった。1912年光明洋行（和洋紙・綿糸布貿易）に入店、1915年の同社解散後、同洋行を磯田常治郎に譲渡した。1919年満州特産⁽⁷⁾株式会社、満州起業⁽⁸⁾株式会社を創立し、それぞれ代表取締役役に就任した。好況期に多くの企業設立に関与した遠藤は、1920年代に入ると、その整理に直面し、遠藤は満州特産⁽⁷⁾株式会社、満州起業⁽⁸⁾株式会社の代表取締役を辞任した。

遠藤裕太とともに満州起業⁽⁸⁾株式会社を設立した千田次郎も、1910年代末に、満州貯金信託⁽⁸⁾株式会社、南満農産⁽⁸⁾株式

(6) 柳沢、前掲論文、309～339頁。

(7) 東方拓殖協会『支那在留邦人興信録』1922年、123頁。満州日報社編『満蒙日本人紳士録』1929年、「え」4頁。

(8) 松坂甫編『満州商工事情並紳士録』1927年、63～64頁。

湯岡子温泉(株)の各社の取締役役に就任したが、1920年代に入るとこれらの会社の業務整理に直面する一方で、大連株式商品取引所委員長(1921年8月)、大連株式信託(株)取締役(1922年4月)に就任し、大連財界の整理にあたった。⁽⁹⁾1929年には、満州起業(株)の社長となったが、「倒産寸前まで追い込まれ、その再建に悪戦苦闘した」といわれる。⁽¹⁰⁾

大連取引所、大連株式商品取引所など、大連の株式界が不振をきわめるようになったのは、朝鮮銀行の満洲支店が緊縮方針に転換する1922年頃からであるが、1926年には、五品取引所告訴事件など、大連株式商品取引所の業務整理にかかわる不祥事も発生した。⁽¹¹⁾篠田利三郎(大連ビルブローカー(株)代表取締役)は、大連株式商品取引人として1920年代の大連株式不況の打撃を直接受けていたと思われる。付表によれば、1925年に867円を納税していた篠田は、1930年には28円と納税額を急減させている。

臼井熊吉・石川万次郎・川上続太郎などは、特産物や米穀の卸売業破綻と多企業投資の失敗が重なって、1920年代の業績悪化を招来した企業家である。

臼井熊吉は、日露戦争後に満州守備軍倉庫から払下げをうけた大麦の売買で数十万円の蓄財をなし、1909年に大連監部通りで特産物貿易業を開業、「一時は満州商界の飛將軍として其名を海外に轟かした」。しかし、1920年大連豆粕事件で大損失を蒙った臼井は、同年に大連株式界にも参入し大連株式商品取引所の創立委員になったが、結局豆粕事件の際に生じた大きな損失を補填することができず、1922年以降は、事実上特産物取引業からも撤退を余儀なくされたと推測される。⁽¹²⁾

一方、石川万次郎は、好況期に多くの企業に株式投資する一方、自ら精米業、株式仲買業を開始したが、1923年以降、売業業のみに専念するようになった。⁽¹³⁾

川上続太郎は、1905年陸軍省の認可を得て商業視察の目的で大連に渡航し、1907年5月肥塚大連支店に入店して各種機械類の販売に従事した。1917年、山県通りに登喜和商会(特産物貿易、電気器具、金物販売)を開業、大連取引所重要物産取引人・銭鈔取引人を兼ねて、多くの新設企業に株式投資を行った。⁽¹⁴⁾「一時は資産二百万円と称せられたる程の成功」⁽¹⁵⁾をおさめた川上も、1920年代に入り、特産物貿易の不振と株式不況の打撃を大きく蒙ることになる。1923年に特産部を廃業して特産物貿易から撤退し、銭荘も廃業するに至った。1926年に川上続太郎が死亡し、義弟中島留三部が合資会社に改組し、店務の整理・縮小にあたった。⁽¹⁶⁾

(9) 千田英二『父千田次郎——その人となり——』1978年、28頁。

(10) 同上書、29頁。

(11) 柳沢、前掲論文、336頁。

(12) 日清興信所『満州紳士縉商録』1927年、233頁。

(13) 同上書、233頁。遼東新報社『在滿二十年記念誌』1927年、5頁。

(14) 「登喜和商会」(東方拓殖協会、前掲書、〈事業篇〉51頁)。

(15) 松坂甫編前掲書、189頁。

(16) 同上書、189頁。満州興信公所『満州事業紹介』1928年、426頁。

[第2表] 好況期多企業投資型実業家

氏名 盛衰タイプ	中心的企業	好況期関与企業と役職	1920年代の動向
石本 鑽太郎 (IV)	和盛公司	教育銀行(株)頭取、正隆銀行取締役、満州肥料(株)代表取締役、満州麦酒(株)代表取締役、満州バリウム工業(株)代表取締役、東亜電気工業(株)代表取締役、満州運輸(株)取締役、東亜土木企業(株)代表取締役、満州醸造(株)取締役、満州殖産(株)取締役、満州セメント(株)取締役、華商証券信託(株)取締役、南満州殖産(株)取締役、滄製薬(株)取締役、大連油脂工業(株)取締役、(株)南満銀行頭取	正隆銀行、大連油脂工業(株)をのぞく大半の企業が1921年以降休業、閉鎖、解散となる。 石本は、1922年8月教育銀行の破綻にともない、財界活動からしりぞく。
野津 孝次郎 (IV)	泰来銭荘 野津洋行	日華証券信託(株)代表取締役、星ヶ浦土地建物(株)代表取締役、日本珪藻セメント工業(株)代表取締役、大連貯金銀行(株)取締役、大連製麻(株)取締役、南満州殖産(株)取締役、山陰運輸貿易(株)取締役、大正信託(株)代表取締役、大連株式信託(株)取締役	日華証券信託(株)、星ヶ浦土地(株)は、業績悪化しながら存続。泰来銭荘は1924年に経営破綻。他の会社は、1920年代初頭に休業、廃業。
河 辺 勝 (III)	松茂洋行	大連銀行(株)頭取、満州製紙(株)代表取締役、中日粉干公司(株)代表取締役、営口倉庫汽船(株)取締役、満州自動車(株)代表取締役、満州坩堝(株)代表取締役、満州ペイント(株)取締役	大連銀行(株)は、1923年7月に満州銀行に合併、他の企業は1920年代に業績不振、休業。1927年に大連商議を退会。
有 賀 定吉 (IV)	菅原工務所	東亜板金工業(株)代表取締役、大連建材(株)代表取締役、東亜土木企業(株)代表取締役、東洋スレート工業(株)取締役、大連製麻(株)取締役、大連郊外土地(株)取締役、満州石鹼(株)取締役、南満州倉庫建物(株)取締役、満州ペイント(株)取締役	1922年菅原工務所経営悪化、東亜土木企業(株)の業績悪化で公職辞任。
古 財 治八 (IV)	大連庶民銀行	大連貯金(株)専務取締役、大連郊外土地(株)専務取締役、(株)旅順銀行取締役、(株)旅順鉄工所取締役、(株)大連ビルブローカー取締役、大連蒸気洗濯(株)取締役、満州林業(株)取締役、大連製油(株)取締役、満州ベンジン工業(株)取締役、(株)中央ホテル監査役	大連庶民銀行の後身、大連貯金信託(株)は1926年12月に経営危機、古財は背任罪で収監。
小 島 鉦太郎 (IV)	大連企業倉庫 新正洋行	大連銀行(株)取締役、大連被服(株)取締役、スミス自動車(株)取締役、大連郊外土地(株)取締役、満州麦酒(株)取締役	1926年まで土木建築請負業。1920年代後半も、大連起業倉庫、大連郊外土地(株)取締役、山県通区長を兼任。
遠 藤 裕太 (IV)	遠藤商店 (為替仲立業)	満州特産(株)代表取締役、満州起業(株)代表取締役、大連取引所信託(株)取締役、満州ソーライト製造(株)取締役	1920年代末に遠藤商店主。満州特産(株)は「目下事実上解散同様」(『年鑑』352頁)。
千 田 次郎 (IV)	満州起業(株)	満州起業(株)専務取締役、(株)満鉄調弁所専務取締役、湯崗子温泉(株)取締役、大連株式商品取引所取引人組合委員長、満州皮革(株)取締役、満州貯金信託(株)取締役、南満農産(株)取締役	1922年大連株式信託(株)取締役、日華特産(株)代表取締役、1923年満州不動貯金(株)監査役就任、1929年満州起業(株)社長、昭和恐慌期に倒産寸前に。

氏名 盛衰タイプ	中心的企業	好況期間と企業と役職	1920年代の動向
篠田利三郎 (III)	篠田利三郎商店	日華証券信託(株)取締役, 大連ビルブローカー(株)取締役, 南満倉庫(株)取締役, 大連株式商品取引所取引人	株式取引人を継続。大連ビルブローカー(株)代表取締役。
川上 賢三 (IV)	満州貯金信託(株)社長, 果樹園経営	東洋石材(株)社長, 満州貯金信託(株)社長, 大連米穀(株)取締役, 大連木材(株)取締役, 満州産業(株)取締役, 満州麦酒(株)取締役, 満州燐寸(株)取締役, 満州澱粉(株)社長, 満州機械工業(株)社長	1920年皇道同志会組織。1921年頃より諸会社整理。1927年頃は満洲澱粉(株)社長と農園経営のみ。
丘 襄二 (IV)	田中合資会社	東亜図書(株)専務取締役, 龍口銀行(株)取締役, 東露興業公司取締役, 哈爾濱土地建物(株)取締役	1924年大連興信銀行(旧教育銀行)頭取となり, 同行の整理に尽力。
川上統太郎 (III)	登喜和商会	大連貯金(株)取締役, 中華電気工業(株)取締役, 大連取引所重要物産取引人, 銭鈔取引人	1920年代業績不振。1923年特産物取引中止。1926年統太郎死去。「廃業状態, 自然消滅の姿なり」(『年鑑』365頁)。
福田顕四郎 (II・IV)	福田煉瓦工場	大連郊外土地(株)取締役, 大連取引所信託(株)取締役, 満州水産(株)社長, 満州ペイント(株)取締役	1924年満州水産(株)退社。1920年代後半も数社の取締役。
石川万次郎 (III)	石川万壽堂主	満州精米(株)取締役, 東亜商事(株)取締役, 満州煙草(株)取締役, 裕昌公司(株)取締役, 石川株式会社(大連株式商品取引所取引人)	1922年精米業, 米穀販売業廃止, 1923年株式仲買業廃止, 薬種業・石炭販売業のみに専心。
神成 季吉 (III)	周水子土地(株)専務取締役	満州製麻(株)専務取締役, 満州バリウム工業(株)取締役, 満州坩堝(株)取締役, 大連隣寸(株)取締役	1920年代後半も満州製麻(株)取締役, 大連火災保険(株)取締役。1928年満州輸入組合連合会理事長。
荘国 四郎 (III)	徳和公司(建築材料販売)	大連モルタル(株)代表取締役, ヤマト商会(株)専務取締役, 東洋防水剤製造(株)取締役, 東亜モルタル工業(株)取締役	荘伴治の子供晋一と協力して徳和公司(建築材料商), 徳海屋(洋服商), 貸家業を経営。
森上 卯平 (IV)	富来洋行	満州商船(株)専務取締役, 満州紡績(株)取締役, 大連株式商品取引所(株)理事	1928年頃富来洋行は「営業所存在せず」(『年鑑』356頁)。
白井 熊吉 (III)	白井洋行	大連株式商品取引所創立委員・取締役, 星ヶ浦土地(株)取締役, 満州不動産(株)取締役, 満州肥料(株)取締役, 日華銀行(株)取締役	1920年代初頭に特産物取引中止。
永田善三郎	永田鉱業(株)	永田鉱業(株)専務取締役, (合資)鈴村鉄工所代表, 閩東州製鉄合資会社代表, 「閩東報」社長	3社とも営業所存在せず解散・休業のようす(『年鑑』352, 356, 357頁)。
田中繁次郎 (IV)	東亜商事(株) 田中東亜商会	東亜商事(株)社長, 田中東亜商事(合資)代表, 大連株式商品取引所取引人	1920年代については, すべての名鑑などに記述なし。
川村 義郎 (III)	南満建物(株)	鞍山不動産信託(株), 南満建物(株)取締役, 石材採掘業(山東省)	関東大震災後に応急木造の貸家を建設。

(出典) 東洋拓殖協会『支那在留法人興信録』〈大連・旅順〉1922年。満鉄興業部商工課『満州商工要覧』1922年。日清興信所『満州紳士縉商録』1927年。『昭和4年度満州会社年鑑』満州商業新報社, 1929年。『在満二十年記念誌』遼東新報社, 1927年。松坂甫『満州商事情並紳士録』1927年。

(備考) 『年鑑』は, 上記『昭和4年度満州会社年鑑』の略。

最後に、川村義郎（南満建物㈱社長）をとりあげよう。1905年に旅順に渡航した川村は、西岡製粉工場、周水子山田煉瓦工場等に勤務し、1908年大連の老虎灘街道において石山の採掘権を獲得した。これに従事する傍ら竹材をも取扱い、1913年には染物業を兼営し、1914年青島・龍口方面で石材の採掘を計画したが成功しなかった。川村は、1917年鞍山に進出して鞍山不動産に投資し、撫順でも事業を企てた⁽¹⁷⁾。1920年代の川村は、経済活動の重心を日本国内に移したようで、関東大震災直後には横浜で数千円を投じて応急木造貸家を建設した。川村は、大連でも貸家業を中心的業務としており、1920年代後半に南満建物㈱取締役、鞍山不動産信託㈱取締役に就任している⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾。

このほか、(I)「発展型」営業者の中にも、好況期に多くの新設企業に投資したため、その整理に直面した企業家が存在していた。たとえば、1915年に淡路町で薬種業を開業した河村統治は、1910年代末にいくつかの新設会社の設立に関与し、20年代には土木建築請負業と輸入商に転換した。河村は、1920年2月に亜細亜貿易㈱、満州製糖㈱を設立してそれぞれ重役に就任したが、1920年恐慌により同年解散を余儀なくされた。1921年柳生亀吉とともに合資会社柳生組（資本金30万円）を設立して、その代表者となったが、さらに1926年3月合名会社石光洋行と合同して大同組と改称した⁽²⁰⁾。松坂甫編『満州商工事情並紳士録』によれば、「毛織物、欧米雑貨輸入、建築材料」が営業科目として挙げられている。しかし、「氏は一時多数事業に関係せしも大正十年頃より一切関係を絶ち本業に専念せり⁽²¹⁾」⁽²²⁾といわれている。

以上のように、1910年代末の企業ブーム期に新設会社の設立にかかわり、その重役となった実業家の多くが、1920年代に入って自らの関与した株式会社の休業・事業中止に直面し、重役を辞任したり、株式投資をやめることになった。石本鎖太郎、有賀定吉、野津孝次郎などの有力な政商的企業家の場合、重役や大株主となった企業が多数に及んだために、その整理には多くの時間を要したが、上述した白井熊吉、石川万次郎、川上続太郎などは、相対的に早い時期に本業に復帰することが可能であった。ただし、遠藤裕太、千田次郎、川上続太郎、白井熊吉らは、大連の株式仲介業に深く関与してしまったために、1920年代前半に株式市場の混乱と沈滞の影響を強く受けることになったといえよう。いずれにせよ、大連の企業ブームが、大連商業会議所役員層のみならず、その会員の少なからぬ部分をまきこんで展開したこと、それゆえ1920年恐慌後に、本業のみならず関係会社の面からも深刻な業績不振と業務の縮小・休業に直面するようになったことを指摘しておこう。

(17) 日清興信所前掲書、123頁。

(18) 松坂甫編前掲書、86頁。

(19) 満州日報社前掲書、92頁。

(20) 松坂甫編前掲書、92頁。

(21) 同上書、92頁。

(22) 同上書、92頁。

(3) 「本業業績低迷」型営業者

1920年恐慌は、卸小売業・貿易業に従事する老舗商店営業者にも打撃を与え、20年代に業績低迷・販売不振に陥る営業者が少なくなかった。ここでは、業績不振に陥った貿易業者の具体例として、**小寺荘吉**（小寺洋行）、**中島常次郎**（直木洋行）、**上野倫**（満洲共益社）の3人を取りあげ、1920年代の営業動向を観察しよう（〔第3表〕参照）。

小寺洋行（輸出入貿易業、油房経営）は、1910年代の躍進、1920年代の凋落を典型的に体現している貿易商である。神戸の貿易商小寺荘吉は、1906年営口で貿易商、豆粕製造業を開始した。満州の繁栄都市が営口から大連に移行したのに対応し、小寺も大連に営業拠点を置き、1910年に大連に一大油房工場を建設した。「機械は其大部分を大阪鉄工場より買入れ、水圧式搾油法を試行した」⁽²³⁾。この新しい搾油工場に、小寺は150万円を投入したという。新工場の製造能力は、1日あたり豆粕4000枚、大豆油1万8000枚に及び、「三泰油房、日清豆粕の二大工場と相鼎立して、互いに隆盛を競」⁽²⁴⁾った。小寺洋行の取扱高は、1915年頃に年商3000万円に達し、原料大豆・豆粕・豆油の売買で三井物産に次ぐ取引高を誇った⁽²⁵⁾。さらに、1910年代末には、豆粕の年商1200万円、大豆油年商700万円に達し、年商総額は1億円に達した⁽²⁶⁾。そして、油房業では「往々三井、鈴木を凌駕し満州第一の霸王を以って自任せる」⁽²⁷⁾に至った。

こうして満州で一、二を争う特産物貿易業者に成長した小寺洋行は、1920年恐慌と大連豆粕事件によって大打撃をうけ、生産量を誇った油房は、1923年6月末以降休業状態に陥り、1925年4月には、大連油房連合会を退会するに至った⁽²⁸⁾。小寺洋行は、朝鮮銀行の満州における大口貸出企業であり、その不良債権は、1925年時で、1593万3000円に達していた。小寺荘吉は弟の又吉とともに1924年3月神戸市栄町2丁目に小寺貿易合資会社（資本金3万円）を設立し、南米・濠洲産の牛肉缶詰類の輸入販売を開始した。しかし、その年商はわずかであり、1926年の公課は1期でわずかに20円58銭にすぎなかった⁽³⁰⁾。

中島常次郎も、1920年代に特産物貿易業で加速度的に業績を悪化させた。大阪市立商業学校を卒業した中島は1906年、神戸直木商店の満州分店として設立された満洲商業^(株)の社員として渡連した。

(23) 「合資会社小寺洋行」（東方拓殖協会、前掲書、〈事業篇〉150頁）。

(24) 伊藤武一郎『満州十年史——成功せる事業と人物——』満州日日新聞社、1916年、121頁。

(25) 同上書、121頁。

(26) 前掲「合資会社小寺洋行」150頁。

(27) 同上記事、150頁。

(28) 「大連所在油房明細表 大正十四年五月現在」（日清興信所『大連特産事情』1925年、所収）。

(29) 伊藤正直「1910-20年代における日本金融構造とその特質（二）」（『社会科学研究』第30巻第6号、1979年3月）6頁、第26表を参照。

(30) 松坂甫編前掲書、119頁。

1912年頃同社が直木久兵衛の個人商店に移ると、主任山本為吉を助ける次席として活躍した。⁽³¹⁾直木商店大連出張所は、大豆など特産物輸出入のほか帝国海上保険会社の代理店を兼ねて相当の業績をあげていた。しかし、1920年恐慌と大連豆粕事件により、直木商店は大きな損失を出し、業務の縮小を余儀なくされた。すなわち「……当市場に於ける豆粕事件の余波を受けて損失を蒙りたる不而已奥地方面より買付けたる特産物の破約等によりて不少損失を招きたる為め兩来緊縮方針の下に営業を続け」、⁽³²⁾1921年には直木家と長期勤続店員を株主とする(株)直木洋行(資本金30万円)を設立し、中島常次郎は同社支配人となった。特産物取扱は継続したが、1921年大連株式商品取引所の商品部現物組合員となって麻袋取引に参入、1923年秋にこの麻袋の思惑取引の失敗で2万円内外の損失を蒙った。⁽³³⁾

1924年春、(株)直木洋行は商品部現物組合員をやめ麻袋の取引を廃止した。中島は、この思惑取引の失敗の責任をとって同社を退社し、1924年に個人商店中島常次郎商店を開業した。開業以来、国内にむけて特産物取引を行い、1924年中に取扱高が200車に達したが、1925年に入り、またしても強気の思惑取引が裏目に出て大きな損失を出した。すなわち、「本年に入り、春高を見越して強気の方針を持し内地よりの引合ひありし際にも高値を唱へ一方奥地沿線方面とも高値見越しの買付約定を為したるに相場は予期に反して漸落歩調を辿り加ふるに内地側も見送りの姿となりて殆んど引合ひを見ざる為買約品及手持品の値下り等にて可成りの損失を招いたのである。⁽³⁴⁾中島常次郎商店の失敗はさらに続いた。「最近に至り相場が漸騰歩調に転じたるも同店は晨の失敗に懲りて形勢観望の折柄相場は予想外の高値を出し遂に仕入れの機を逸し偶々安値当時奥地方面に於て買約せるものも値上りにより不渡となりたる関係上又復損失を蒙り更に其後銀の手当てをせざる内に相場暴騰し或は加藤商店の豆粕事件に関連して損失を重ねたる等数回の失敗にて進退兩難の窮境に陥るに至った」⁽³⁵⁾のである。こうして中島常次郎は、幾度となく大豆相場の変動に翻弄されて借金を膨張させ、1920年代後半には特産物取引そのものを廃業せざるをえなくなったと思われる。

休業や廃業に陥った小寺洋行、中島常次郎商店に比較すると、取引規模を縮小させつつ営業を継続させたのが、満州共益社である。同社も1910年代末から1920年代初頭に朝鮮銀行から多額の借入れを行っており、1925年時点で331万4000円の固定貸(大半が不良債権)を受けていた。⁽³⁶⁾満州共益社の前身は、京城の共益社であり、1913年奉天城内大北門街に支店を開設したのが満州進出のはじまりであった。1913年奉天支店を資本金50万円の株式会社組織とし、綿糸布貿易に参入、1919年に

(31) 「中島常次郎商店」(『満州特産興信録』42～43頁、前掲『大連特産事情』所収)。

(32) 「株式会社直木洋行」(同上、40頁)。

(33) 同上記事、40頁。

(34) 前掲「中島常次郎商店」42頁。

(35) 同上記事、42頁。

(36) 伊藤正直前掲論文、6頁、第26表。

「満鮮分立の議起り」従来の共益社出資者に伊藤忠商事の後援をえて資本金100万円（四分の一払込み）で満州共益社が設立された。⁽³⁷⁾当初田中清吉社長、竹中専務の経営体制であったが、1920年恐慌で「約参百万円」という巨額な損失を蒙り、朝鮮銀行からの融資でどうにか危機をきりぬけた。⁽³⁸⁾これにともない朝鮮銀行から京城共益社に派遣された菅原憲亮が1921年6月に専務取締役役に就任した。

満州共益社は「綿糸布類の買付輸入及特産物の売買を主業」とし、1924年からは建築材料と機械の取扱を開始した。⁽³⁹⁾特産物は、「開原、四平街、長春、哈爾濱等の奥地沿線各出張所に於て買付くる外当地市場に於ても売買を為し仕向地は塩釜、関東地方を首め伊勢湾、神戸、鹿児島等にして昨年度（=1924年度）の取扱高1千万円内外に上⁽⁴⁰⁾」った。一方、綿糸布の中国商人向販売は、1924年度で700万円にのぼっていた。しかし、特産物、綿糸布のこうした売買は、利益の拡大にはつながらなかったようである。「時節柄所期の利益を挙ぐるに至らず今期の如きも却って二千余円の損失を招いた模様⁽⁴¹⁾」と、『満州特産商興信録』は指摘している。満州共益社は、前述のように朝鮮銀行からの多額の借入金をかかえており、その負債は1925年頃に減少には向かっていなかったことがうかがわれる。

以上のように、1910年代に成長を遂げた特産物貿易業者の多くは、1920年恐慌の打撃から回復をなしえず、1920年代には休業・廃業に追いこまれるか、多額の借入金をかかえたまま、業績低迷に呻吟していた。貿易商としては、このほか、宮崎商会（石炭、特産物貿易）、大東公司（石炭、貿易商）、角田洋行（綿糸布貿易業）、西川商店（輸出入貿易、機械、コークス）なども〔第3表〕の「1920年代営業」欄の記述にあるように、業績不振をつづけていた。

これに対し、千村洋行（度量衡器販売）河又出張所（醤油・みそ・白米）、深尾商店（硝子・鉄道船舶用ランプ販売）、大塚（合名）大連支店（銘酒・食料品）、樫村洋行（時計・貴金属）などは、1920年代にいずれも販売高の減少などに直面したものの、大連市内の老舗商店としてある程度の力を保持し続けていた。

たとえば千村春次の金物・度量衡器部門における納税額は、459円（1920年）から、「150～200円」（『帝国興信録』1930年頃）ないし「68円」（『大日本商工録』1930年頃）に大きく減少したが、記述資料では、「度量衡の販売並に其製作修理を兼業するに至って業態益々進み、今や財界の第一人者として確固不拔の基礎を築いて居る⁽⁴²⁾」と指摘されている。また、河又出張所の年商も、1910年代末に比べて大きく減少しているが、1920年代後半においても「満州に輸入される、醤油の三分の二は河

(37) 「株式会社満州共益社大連出張所」（前掲『満州特産興信録』52頁）。

(38) 「株式会社満州共益社」（満州商業新報社編『昭和4年度満州会社年鑑』431頁）。

(39) 前掲「株式会社満州共益社大連出張所」52頁。

(40) 同上記事、52頁。（ ）内は引用者。

(41) 同上記事、52頁。

(42) 大来修治『大連二十年連合祝賀会 記念誌』遼東新報社、1924年、21頁。

[第3表] 「本業業績低迷」 営業者

氏名 盛衰タイプ	商店名	営業科目	1910年代営業	1920年代営業
井上伊次郎 (Ⅲ)	井上誠昌堂	売薬業	1911年来連。1916年店主の内地引揚により大連店舗経営。	1919年井上伊次郎より譲渡うけた三沢成家が開業。1922年合資会社に改組（資本金59千円）。
原田 栄治 (Ⅳ)	日栄商会	貿易業	1906年貿易業、1908年関東鉄工所開設し1910年閉鎖。日栄商会開業。	1923年合資会社日栄商会設立（豆油容器、機械製作）。
千村 春次 (Ⅲ)	千村商店	度量衡器商	1913年老虎灘に大正牧場、1919年旅順で果樹園。貸家業も経営。	1922年合名会社に改組。宗教・文学・園芸など多方面で活動。
小寺 荘吉 (Ⅳ)	小寺洋行	製油・輸出入貿易	1909年来連。	1924年6月以降油房休業。1924年3月に神戸栄町2丁目に合資会社小寺貿易設立。
鳥羽 京治 (Ⅲ)	深尾商店	硝子、鉄道船舶用ランプ	1905年開業。	1920年尾舖健治郎が業務継承。「同業者中一流」。
岡崎森之助 (Ⅲ)	山善商店	米穀卸商、貸家業	1910年度渡満後米穀商、貸家業を営業。	
河盛恒次郎 (Ⅲ)	河又出張所	醤油、みそ、白米	中国人の間に醤油販売。	「毎年満州に輸入する醤油の数量中三分の二は河又醤油に依って占められる」老舗醤油商。
小杉 藤六 (Ⅲ)	角田洋行 (本店愛知県)	綿糸布貿易商	1905年角田市郎兵衛が開業。1916年株式会社に改組。顧客は中国人。	「不況後は一般商品とともに薄利となったので其後は極度に消極方針を取って居る」。
金子 隆二 (Ⅳ)	大連製油(株) 五菱商会	植物油の製造・販売	1917年満鉄退社。大連油脂精製合資会社代表委員。1919年大連興業社の設立企画。	1920年大連製油(株)専務取締役「数年前廃業状態に陥る」(『年鑑』352頁)。
玉谷 隈吉 (Ⅲ)	玉谷洋行	重要物産取引人、(株)商品取引人株式会社取引人	1907年来連。元神戸で営業。	『事情・紳士録』のみ「堅実なる経営者」との記述あり。
中島常次郎 (Ⅳ)	直木洋行	特産物貿易	1909年満州商業(株)大連支店詰として渡満、1919年(株)直木洋行支配人。	1924年4月直木洋行退社、中島常次郎商店創設(特産物)、1926年養升福銭荘経営。
久保 通猷 (Ⅳ)	久保商会	鉄材、硫化染料	1916年八幡製鉄所の特約販売店、化学工業の研究と硫化染料製造。	鉄価暴落で打撃。染料、大正米の製造販売。化学的発明に力注ぐ。
沢田治三郎 (Ⅲ)	大塚(合名)支店	銘酒、和洋食料品	1906年大塚(合名)支店長として来連、1910年独立。	店主は用務のため出張多し。貸家業経営。吉野町区長代表
村上 寅造 (Ⅲ)	村上商店	薪炭、米穀、石炭、貸家	1907年より本業開始。	『事情・紳士録』のみ掲載。
大原計三郎 (Ⅲ)	大原洋行	食料雑貨商	1910年開業。	「大連市屈指の食料雑貨商」。
上野 倫 (Ⅲ)	満州共益社支店	特産物・綿糸布貿易	1919年大連支店開業、好況期に多大な利益、上野は、菅原憲亮専務取締役のもとで支配人。	1920年恐慌で大打撃。整理を断行。「当社近年の経営振非常に堅実となり成績亦良好を加えて来た」(『紹介』371頁)。
小島 定吉 (Ⅳ)	小島定吉商店	セメント石灰商	1906年渡連。杉田商店で十余年勤務。1917年店舗譲受け開業。	1926年1期公課40円。『事情・紳士録』のみ掲載。
宮崎 愿一 (Ⅲ)	宮崎商会	海運業、石炭販売、特産物輸出業	1914年煉瓦製造、1915年石炭特約販売。	1921年父伊太郎病死、愿一が継承、大連石炭(株)社長、同社「草場工務所内に本社を置くも休業状態」(『年鑑』353頁)。

氏名 盛衰タイプ	商店名	営業科目	1910年代年営業	1920年代年営業
杉山 治郎 (Ⅲ)	柴谷(合名)	酒商	食料品・酒商として発展。 青島に出張所開設。	1920年代に入り、青島に営業主力 おく、『記念誌』で平和街での営 業のみ確認。
小沢新之輔 (Ⅲ)	大連取引所 信託(株)取締役 役兼支配人	重要物産取引の担 保・精算事務、資 金の融資	1914年大豆買付で渡満、大連 取引所信託(株)に入所、同社の 支配人に。	中村得三郎の不祥事事件の後始末 と同社整理。
西川光太郎 (店主交代) (Ⅲ)	西川商店	輸出入貿易、機械、 コークス	1909年サミュエル商会、1910 年西川商店開設。	1923年西川光太郎急死、プリン ストン大学留学中の西川高嶺が大 連で業務継承。1924年(株)に改組。 1928年前期繰越損金97,000円。
樫村 フジ (店主交代) (Ⅲ)	樫村洋行	時計、貴金属、写 真資料	1911年樫村保死亡。未亡人フ ジ名義で営業。	1921年10月、一族で(株)組織(資本 金10万円)、フジが急死し、溝口 福次郎(浅田新之助)が代表に。 公課1期9円。1920年代末に浪速 ビルに新築移転。
加藤吉五郎 (店主交代) (Ⅳ)	加藤金物店	建築用金物類	1907年浪速町に開業。1910年 代末西岡子の鉄工場の規模拡 張、鉄筋鉄骨作業行う。	1923年寺田正太郎が継承。同業組 合評議員1期公課8円。
山崎 清吉 (Ⅲ)	山崎運送店	運送業、新聞取次		1926年遼東新報社販売部引受け。 その他内外新聞取次販売行う。1 期公課20円。
吉田辰五郎 (第5表に も掲載可) (Ⅲ)	大東公司	石炭・貿易商	1907年大連で土建業、大東公 司設立され吉田主任。好況期 に大連石灰(株)などに投資。	満鉄の石炭指定販売人の権利を 1926年他に譲渡。1925年より礦油 販売を開始。27年合資会社、1923 年に開設した(合資)新橋は不況 で営業閉鎖(『年鑑』295、363頁)。
池田 桑作 (第5表に も掲載可) (Ⅳ)	福来号支店	金銀両替・綿糸布 輸出	1917年バグナル・エンドヒレ ス会社退社し、営口で同社開 業。	1923年福来号退社。雑穀製油原料、 大豆粕輸出商を開業。東亜印刷(株) の監査役も兼任。
横山 力一 (Ⅲ)	長崎屋	呉服商	記述なし。	『名録』にのみ掲載(横山力三)。
中川 三七 (Ⅲ)	満豪興業(株)	「甘草エキス」の 製	1917年設立、関東都督府、満 鉄から補助うけて開業。	「最近多少の減収を見る」(『年 鑑』127頁)。
平井大次郎 (Ⅲ)	平井洋行	小野田セメント販 売店、貸家業	1911年山東洋行支店長。	1923年山東洋行の組織変更ととも に独立。1926年1期公課14円。
辰巳 銀二	内外興業(株)	欧米建築材料直輸 入商	1916年藤原商店大連支店長と して来連。	1924年辰巳銀二商店として独立。
坪井 義造 (Ⅲ)	南満州鉱業 (株)	鉱物採掘業	夏家河子で、滑石粉末作業を 開始。	1921年炭坑採掘中止。夏家河子工 場閉鎖し、満鉄に譲渡(『年鑑』 131頁)。
山田 三平 (Ⅲ)	大連株式信 託(株)	有価証券の売買、 信託	1920年設立。	財界不況により資産内容悪化。朝 鮮銀行の指導下で、第二株信を設 立し、業務を移管すべく整理中 山田は、役員でなくなる(『年鑑』 169頁)。

(出典) [第3表]と同じ。

(備考) ①『年鑑』…『昭和4年度満州会社年鑑』満州商業新報社、1929年。

②『事情・紳士録』…松坂甫『満州商事情兼紳士録』1927年。

③『名録』…篠崎嘉郎『大連商工名録 昭和2年』1927年。

④『記念誌』…『在満二十年記念誌』遼東新報社、1927年。

又である⁽⁴³⁾』という圧倒的シェアを維持していた。これらの老舗商店は、特定商品の取扱いにおいて大連のみならず満鉄沿線都市の在留日本人市場に根づよい販売力をもっており、また村上商店（薪炭・米穀）や千村商店、井上誠昌堂（薬種業）のように、本業の不振を貸家業経営によって補完しようとした業者も存在していたのである。

以上のように、1910年代後半から20年代後半にかけて、業績不振に陥る業者には、大きくわけて「好況期多企業投資型」実業家と「本業業績低迷型」業者の2つのタイプが存在することが〔第2表〕と〔第3表〕より明らかとなった。これらの企業家は、業績不振に陥りつつも、大連の都市にとどまって営業を継続しようとしたのであるが、このほか、事業休止・企業閉鎖に追い込まれたり、業種転換をしたり、日本本国へ帰国したのも少なくなかった。

(4) 「業種転換」業者

不況期に入り、1910年代までの営業科目を変更して、別の営業科目を中心に商工業経営を行うようになった業者は、〔第4表〕のとおりである。ここでは、大羽豊治、田中安之助、村山瀧三郎、菅為蔵の業種転換をややくわしくみてみよう。

大羽豊治は、日露戦後に大連造船所を新設して船舶修理業に従事し、やがて日本貿易商會を創業して、硫黄・硝石・滑石鉱の一手販売をこころみた。また1918年から19年にかけて日本全国の各府県の勸業銀行・産業組合をまわり、豆粕の産地直輸入の必要性を訴え、その後1922年に大日本農興⁽⁴⁴⁾（株）常務取締役となって豆粕の対日輸出を行った⁽⁴⁵⁾。しかし、滑石鉱（海城）の販売など、日本貿易商會の事業は1924年に全面中止し、それにかわって牡丹江木材公司のもとに木材買売業を開業した⁽⁴⁶⁾。

田中安之助（伊勢作洋行）は、当初大連で食料品雑貨商（酒・醤油・味噌・酢・漬物商）を開業し、大連本店のほか、奉天・鉄嶺に支店を設置した。このほか特産物輸出業にも参入したが、1920年頃にこれを廃止し、食料品雑貨販売に力を注ぐようになった⁽⁴⁷⁾。安政元年生まれの田中は、1927年以降になると、各種業者名鑑などから姿を消すので、1920年代末には、隠居・引退したと推察される。

村山瀧三郎（麦粉・砂糖商）は、1905年大連に上陸して、大山通にメリケン粉と砂糖の卸売商店を開き中国人との取引を開始した。さらに村山は、1912年に信濃町に米穀精米所を設置し、ついで朝鮮米の輸入をこころみだがうまくいかずいずれも廃業した。1920年代前半の村山は、麦粉・砂糖商と貸家業を兼営し、平田包定（貴金属・時計商）と農園の共同経営に従事していた⁽⁴⁸⁾。

(43) 日清興信所、前掲『緞商録』128頁。

(44) 前掲『在満二十年記念誌』158頁。

(45) 日清興信所、前掲『緞商録』107頁。

(46) 前掲『在満二十年記念誌』158頁。

(47) 日清興信所、前掲『緞商録』177頁。伊藤武一郎前掲書、11頁。

(48) 大来修治、前掲『記念誌』51頁。

[第4表] 営業科目の転換

氏名 盛衰タイプ	商店名	営業科目	1910年代営業	1920年代営業
池田 桑作 (IV)	福来号支店	金銀両替・綿糸布	1917年バグナルエンドヒレス社退社、管口開業。	1923年～雑穀製油原料、大豆粕輸出商。
吉田辰五郎 (III)	大東公司	石炭輸出・販売	大東公司設立により、主任に就任。	油房が1923年以來満鉄から直接石炭を購入するようになったため、売上激減し、1925年より礦油販売業に転換（『紹介』432頁）。
中川竹太郎 (IV)	中川商店	鉄材商	1915年満鉄退社。鉄材の輸入販売。	1926年大連キリスト教青年会総理事。
大町 土佐 (III)	志岐組大連支店	土木建築請負業		1922年満州土木建築業組合の理事長になり、業界活動のみに専念、志岐組、1925～26年に経営危機に陥る。
田中安之助 (III)	伊勢作洋行	醬油輸入、特産物販売		特産物貿易から手をひき、食料品雑貨商へ。
大羽 豊治 (III)	日本貿易商会	鉱業	中国に硫黄・硝石の一手販売。	1922年大日本農興協設立、当社の常務取締役。 (対日豆粕輸出)
村山龍三郎 (IV)	村山製穀所	麦粉・砂糖商	1912年信濃町に米穀精米所、朝鮮米の輸入企画するが失敗す。	多数の家屋を建設して貸家業。平田包定と農園経営（『記念誌』188頁）。
菅 為蔵 (III)	東郷商会	建築材料商	鴨緑江孫木公司の原木販売。	1916年に東郷旅館開業。1920年代には、旅館経営に主力。
今津 十郎 (IV)	今津商店 大連商業銀行	木材商 銀行業	1915年金物商・紀信洋行を個人経営に。	今津は大連商業銀行に特化。紀信洋行は店員・伊藤伊太郎に、材木部は遼東材木会社に譲渡す。

(出典) [第3表] と同じ。

(備考) ①『紹介』…満州興信公所『満州事業紹介』1929年。

②『記念誌』…遼東新報社『在満二十年記念誌』1927年。

最後に菅為蔵の業種転換をみておこう。菅為蔵は、日露戦争時に食料品諸雑貨を携帯して管口で軍用達活動を行い、その後、大連、ウラジオストク、などに支店を開設して、タマネギ・馬鈴薯の日満貿易に携った。1907年大連に本拠を置いて、鴨緑江採木公司の原木販売を開始、当時の建築ブームによって急速な発展を示した。菅は、1916年大連市東郷町で東郷旅館を副業として開業した。この旅館開業後も、数年間原木の販売を継続したが、1920年代中葉には「旅館の方に主力を集中して木材販売の方は休業に近い状態になって⁽⁴⁹⁾」いた。東郷旅館は、1922年6月に資本金1万円の合資

(49) 前掲『在満二十年記念誌』146頁。

会社に改組され、1920年代末も営業を継続しているが、⁽⁵⁰⁾合資会社東郷商会は1928年11月に「⁽⁵¹⁾廃業状態解散セルモノノ如シ」と記述されている。以上のように、菅為蔵は、1910年代までは、木材販売業を主体としていたが、1920年代に入ると旅館業に主力を注ぎ、木材販売業は廃業同然になったことがわかる。

以上、「業種転換」の四事例を検討したが、村山瀧三郎と田中安之助の場合、1910年代に手がけた新事業を廃止して、本業に特化したので、厳密には、「営業科目の転換」というより、「本業への復帰」と規定すべきかもしれない。ただし、特産物輸出業（田中安之助）、朝鮮米輸入業（村山瀧三郎）、滑石鉱の採掘・販売業（大羽豊治）、木材販売業（菅為蔵）など好況期に試みた営業科目が、それぞれ1920年代に入って不振となり、木材買売業（大羽）、食料雑貨商（田中）、麦粉・砂糖商（村山）、旅館業（菅）へ営業の主力を注がざるをえなかったとまとめることは許されよう。

(5) 休業・本国帰国営業者

〔第5表〕は、銀行経営の破綻や大連での営業不振の結果、日本本国（内地）に事業の重点を移したり、本国に帰国したと推察される営業者を抽出したものである。このうち、大庭仙三郎、奥村千吉、村尾敏一、大神九八郎については、日本本国での業務が資料により確認しうるが、津村甚之助、平塚半次郎・森美文・清水久六・黒崎真也・須田六四郎・鈴木致の7人については、事業停止後の行方が判明せず、本国への帰国は筆者の推定にすぎないことを指摘しておきたい。

〔第6表〕は、1920年代の特定時期に営業を休止、廃業したと推定される営業者42名を抽出したものである。「1920年代営業動向を示す資料」欄にみられるように〔第6表〕掲載の営業者の特徴は、1920年代後半期の納税額、営業に関する記述ともにデータ記載がないものが圧倒的に多いことである。管見の限り、大連個人商店主については『大連商工名録 昭和二年』、株式・合資・合名会社については『昭和4年度満洲会社年鑑』の捕捉率がきわめて高いのであるが、こうした資料に詳しい記述のない営業者が30人にのぼった。このため〔第6表〕の営業者の1920年代後半における実態については、今日のわれわれには知るすべがないが、おそらく、企業活動そのものを停止した営業者が大半を占めると思われる。

(6) 小 括

以上、〔第2表〕から〔第6表〕により、(III)「業績低迷型」ならびに(IV)「閉店・休業型」の各営業者の1910年代後半から1920年代後半にいたる営業動向を概観してきた。1920年代に衰退ないし低迷する営業者は、1910年代末の企業ブーム期に多くの新設企業の設立に関与し、20年恐慌後に

(50) 「合資会社東郷旅館」（前掲『満洲会社年鑑』253頁）

(51) 同上書、357頁。

[第5表] 日本本国への帰国推定者（営業の重心移動を含む）

氏名 盛衰タイプ	商店名	営業科目	1910年代営業	1920年代営業
大庭仙三郎 (III)	大庭組	土木建築請負	1914年独立請負業、1915年大庭商会開業。	1925年合資会社、東京大正組と共同して樺太における富士製紙工場の工場建設に従事（『事情・紳士録』80頁）。
奥村 千吉 (III)	奥村洋行支店	質業・古物商	米穀、醤油業（博多産）	神戸市外に20余万坪を買収して住宅経営。大阪天王寺本店に起居して、大阪の鋳銅所、小倉倉庫業、大連支店を監督。
津村甚之助 (IV)	大連銀行	銀行業	1917年大連市伊勢町に設立（資本金300万円）。津村、専務取締役就任。	1923年満州銀行に合併。津村は帰国か？
平塚半次郎 (IV)	龍口銀行	銀行業	1915年横浜正金銀行東京出張所主任→(株)龍口銀行常務取締役	1924年8月龍口銀行破綻。25年正隆銀行に併合決定。平塚は帰国か？
森 美文 (IV)	(株)大連株式会社商品取引所理事	取引所関連業務	1920年(株)大連株式会社商品取引所創立、常務理事（株式部担当）	「五品取引所告訴事件」で告訴取監。
大神九八郎 (IV)	大連貯金(株)		1913年大連貯金(株)社長	1920年代に長崎で質店経営、長崎市水道事業企画協議会町内代表者。
清水 久六 (IV)	塩久呉服店	呉服商	1906年より一流呉服店として発展。	1920年塩久呉服店の閉館により帰国か？
村尾 敏一	村尾汽船（合資）	船舶・海運業	1915年設立。資本金2万円。	「業務の主体は事実上神戸支店にあり」（『年鑑』237頁）。
黒崎 真也 (IV)	大連銭鈔信託(株)	銭鈔、信託		1924年大連銭鈔信託会社事件（情実融資発覚）で辞任。
須田六四郎 (IV)	平和銀行支店	銀行業	1920年8月設立。花柳界方面の小口金融機関。	1922年8月休業。大連支店で業務整理つづける。1928年時重役名に須田六四郎の氏名なし。
鈴木 致 (IV)	(株)旅順銀行支店	銀行業		1923年満州銀行に合併。鈴木致は帰国か？

(出典) [第3表] と同じ。

(備考) ①『事情・紳士録』は、松坂甫『満州商工事情並紳士録』1927年の略。

②『年鑑』は、『昭和4年度満州会社年鑑』満州商業新報社、1929年の略。

その企業の整理に直面した「好況期多企業投資型」実業家、1920年代の大連日本人経済界の不況により、大連渡航・開業以来継続してきた特定事業が不振に陥り、業績低迷に直面した「本業業績低迷」型営業者の、2つのタイプがあり、さらにこうした業績低迷・業績不振のほかにも、事業休止・企業閉鎖や、営業科目の転換ないし重点移動、日本本国への帰国や日本「内地」事業への重点移動、がみられることが明らかになったといえよう。

[第6表] 「事業休止・廃業」 営業者

氏 名	商店名	営 業 科 目	1920年代営業動向を示す資料
岩崎文五郎	岩崎回漕店	回漕業	『紳士録』『商工名録』『年鑑』に記載なし。
丹羽幸三郎	丹羽商店	特産物店	同 上, 1923年商誠非会員
彭城 得	大連運輸商会	運輸業	同 上, 1923年・25年商議非会員
岡崎 忠雄	岡崎汽船	海運業	同 上, 1925年非会員
岡田敬五郎	松浦屋	諸紙, 文房具, 印刷	『商工名録』に「松浦屋印刷所 高瀬又五郎」と記述。
落合 実	東亜図書(株)	図書出版運動用具	東亜図書(株)…「大正十二年頃から休業状態を続け」(『年鑑』166頁), 落合実については, 記述なし。
木村孫三郎	大成洋行	綿糸布商	『紳士録』『商工名録』に記載なし。
和田 篤朗	満州殖産(株)	畜産業	『紳士録』『商工名録』『年鑑』に記載なし。
金子 八朔	(合資)馬場商会	米穀商	同 上
吉本吉太郎	吉本商店	麻袋, 麻布	同 上
田中重太郎	徳隆公司	海運, 鉱業	同 上
竹田 保	東洋商事(株)	商品売買, 仲介委託	同 上
谷崎 百蔵		木材業	同 上
角田 鶴吉	角田呉服店	呉服販売	同 上
中村与資平	日米公司	直輸出入商	同 上
中村彦一郎	範田商会	輸出入, 建築材料商	同 上
植木 藤藏		製剤業	同 上
黒川 太吉	黒川太吉商店	海軍用達, 海産物	同 上
楠 正彦	久壽屋質店	質屋業	同 上
山口金次郎	大連土木建築(株)	土木建築請負業	「不況襲来以後, 振はず現在は資産として残された。…中略債権約参拾万円也…」(『年鑑』137頁)
山本 神励	大正コンクリート(株)	鉄筋コンクリート設計	大正コンクリート(株)…「大正十一年頃より廃業状態, 目下其の実体なし」(『年鑑』353頁), 山本については記述なし。
矢中 快助	矢中商店	建築材料	『紳士録』『商工名録』『年鑑』に記載なし。
山本 虎一	旭煉瓦(合資)	煉瓦製造	同 上
山下 末郎	山下鉄工所	機械器具製造	『商工名録』に「機械卸山下末郎」の記述あり。
山田徳之助	山田商会	建築材料商	『商工名録』に「山田商会 山田タネ」の記述あり。
香林 静豊	大連被服(株)	被服製造	『紳士録』『商工名録』『年鑑』に記載なし。
兒山 歌吉	ハリス商会	船舶用達	『商工名録』に「合資会社ハリー商会」の記述あり。
小西 富三	富利洋行	麻袋・雑貨	『紳士録』『商工名録』『年鑑』に記載なし。
琴坂幸太郎	琴坂商店	貿易商	同 上
小坂安次郎	木村洋行	食料雑貨商	同 上
秋元 吉平	大連木材(株)	木材販売	会社・人名とも, 同上
青木栄之助	内国通運(株)	海陸・運送業	会社・人名とも, 同上
斎藤茂一郎	(株)南昌洋行	石炭・輸出	1920年(株)南昌洋行専務取締役, 撫順炭販売会社取締役, 1927年満州綿花(株)専務取締役(『紳士録』)
斎藤又太郎	斎藤油房	油房業	『紳士録』『商工名録』『年鑑』に記載なし。
桜井 豪	大順公司	請負業	同 上
富田太一郎	満州証券信託(株)		「大正十二年以降廃業, 目下営業所なし」(『年鑑』352頁)
三宅 如平	三宅洋行	販売業	『紳士録』『商工名録』『年鑑』に記載なし。
三上外守男	満州家畜(株)		同 上
柴柳 新二	柴柳洋行	機械金物商, 工事請負	同 上
白石 保善	白石洋行	和洋雑貨商	活動の拠点を青島に移す。1932年頃の青島店の年商30万円内外。(木村雄平『山東商工業内録』1933年, 117頁)
柴田 定彦	柴田商会	醬油・酒・米商	『商工名録』に「京屋 柴田安蔵」の記述あり。
関 五夫	大連運輸(株)	運送業	『紳士録』『商工名録』に記載なし。『年鑑』に「合名会社大連運輸公司所在不明」の記述あるのみ(366頁)

(備考) ①『紳士録』…『満蒙日本紳士録』満州日報社, 1929年5月。松坂甫『満州商事情並紳士録』日華興信公所, 1927年7月。

②『商工名録』…篠崎嘉郎『大連商工名録 昭和二年』大連商業会議所, 1927年。

③『年鑑』…『昭和4年度満州会社年鑑』満州商業新報社, 1929年。

3. 業種別動向

1921年時の大連日本人商業会議所会員（支店長、出張所長をのぞく）の販売高低迷、業績不振、休業、閉鎖の具体相については、以上の考察により、ほぼ明らかになった。ここでは、2節の考察をふまえて、とくに1920年代に入り経営的衰退が顕著にみとめられる若干の業種をとりあげ、その業種における日本人商工業者の衰退のメカニズムを検討してみたい。ここでとりあげる業種は、銀行業、職人層、特産物貿易商の3業種である。

(1) 銀行業

大連日本人経済界全般の不況、信用収縮をもたらした金融的条件として、1922年から26年にかけて相次いだ金融機関の破綻、休業が重要な位置を占めていた。⁽⁵²⁾

まず、1922年8月末から9月にかけて、大連教育銀行（資本金50万円、払込資本金20万円）と平和銀行が、業績悪化と信用不安により休業に追い込まれた。このうち大連教育銀行は、有力な政商的企業家である石本鎖太郎の機関銀行であったが、朝鮮銀行大連支店の固定貸整理方針の発表を契機として、石本と雉本支配人の放漫情実貸付が露呈し、休業を余儀なくされたのである。⁽⁵³⁾翌1923年7月、朝鮮銀行の斡旋により、大連銀行・満州商業銀行・奉天銀行・遼東銀行の4銀行が合同し、満州最大の「地場」普通銀行、満州銀行が発足した。⁽⁵⁴⁾しかし、この満州銀行は、母体となった旧4行がそれぞれの不良債権の全面的整理を完了しないまま合併したために、業績の好転をみないまま、1920年代に、たびたび取付け騒動をひきおこしていった。

大連金融界のみならず、満州金融界全体を震撼させたのが、1924年8月に勃発した龍口銀行の休業問題であった。龍口銀行は、1913年、資本金3万円で設立された日中合併銀行であるが、増資と他行の吸収合併により、1923年には資本金1540万円（払込600万円）の満州有数の地方銀行になった。⁽⁵⁵⁾龍口銀行は関東大震災後の1923年下期よりしばしば預金引出しに直面し、翌24年8月中旬、ついに大連手形交換所の交換尻に対して、102万円の決済不能を露呈した。その要因は、財界不況の深刻化による貸出資金の回収困難、経営内容の不堅実な小銀行の合併にともなう資産状態の悪化にもとづくものであり、さらには、1924年4月以降の建築業の資金需要拡大による預金引出しが、経営破綻の直接的契機になったといわれる。⁽⁵⁶⁾龍口銀行の休業声明が出されると、大連取引所、大連株

(52) 詳細については、前掲拙稿「構成と活動」334～337頁。

(53) 「教育銀行休業問題」（根来可敏『満州経済時報』第3巻第10号、1922年10月）18～20頁。

(54) 「合併案可決と新銀行設立期」（同上『時報』第4巻第6号、1923年6月）9～10頁。

(55) 朝鮮銀行史研究会『朝鮮銀行史』東洋経済新報社、1987年、331頁。

(56) 関東局官房文書課『関東局施政三十年業績調査資料』1937年、361頁。

式商品取引所、大連銭鈔信託(株)などは、相次いで休会、休社し、満州銀行の取付け騒動、大連市内油房の休業など、大連および満鉄沿線都市の企業、金融機関、取引所は信用不安から一大パニックに直面したのである。⁽⁵⁷⁾ 8月17日、平塚半次郎頭取は全財産を放出して辞表を提出し、急遽相生由太郎を委員長とする龍銀整理委員会が結成され、その後1年余にわたる日本政府との交渉の末、ようやく1925年11月に安田銀行系の正隆銀行との合併が行われて、事態は収拾にむかった。⁽⁵⁸⁾ 正隆銀行への合併という龍銀問題の処理は、満州における中日間の信用秩序維持という大義名分のもと、正隆銀行の頭ごしに決定されたが、合併後の正隆銀行は、前述の満州銀行と同様に財務状況の悪化をまぬがれず、その経営努力にもかかわらず、業績の改善ははかばかしく進展しなかった。⁽⁵⁹⁾

こうして、1922年から1925年にかけて、大連の諸銀行は、経営破綻、休業、整理、合併をくりかえし、同時期の株式市場の沈滞ともあいまって、信用収縮と信用不安を醸成していったのである。[第3表]で掲載した「本業業績低迷」営業者の中には、以上のごとき金融機関の動向に規定された資金調達難に直面する企業家も少なくなかった。

(2) 日本人職人層・日本人商人の没落と中国人の台頭

1920年代の不況のもとで、好況期における在満日本人の中・下層の職業が中国人によって奪われる事態が生じた。とりわけ、かつて日本人商店のもとで雇用されていた中国人職人・店員が独立して自ら開業するケース、中国商人の商品ネットワークによって安価な商品の仕入を行って、日本人商店・職人より安価な商品・サービスを提供するケースが、増加したのである。⁽⁶⁰⁾ いくつかの職種を例にとって、1926年頃の日本人と中国人の競合状態をみておこう。⁽⁶¹⁾

〔洋服店とその仕立職〕

1926年10月の大連の洋服店は、「邦商で組合に加入してゐる者五十四戸、加入せぬもの約三十戸、支那人三十五六戸合計百二十戸」⁽⁶²⁾で商店経営者のレベルでは日本人が84店と多数を占めていた。だが、洋服の仕立職人・洋服店店員でみると、「邦人の職人は経営を兼ねて居るものが約四十人、職人

(57) 『満州日日新聞』1924年8月20日付、21日付。

(58) 「龍口銀行救済ニ関スル件」(大連商工会議所『大正十四年度大連商工会議所事務報告』58頁)。

(59) 柳沢遊『日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史——』青木書店、161～163頁。

(60) こうした問題意識のもと、1924～27年に在満日本人の経済的衰退を論じた論文、調査書が相次いで刊行された。その具体例として、「在満日本人の社会的地盤」(『満州之社会』第2巻第12号、1924年8月)、今景彦「在満州日本人の職業問題」(『満蒙』45冊、1924年4月)、川合正勝「満蒙植民地問題と中日両国人——生活程度との関係——」(『満蒙』77冊、1926年9月)、満鉄興業部商工課『対満貿易の現状及将来』下巻、1927年、を参照。

(61) 『満州日日新聞』では、1926年11月16日付から12月7日付まで、18回にわたって、「大連日支人職業の盛衰——本年十月末の有様——」と題する特集記事を掲載している。本稿で紹介するのは、上記特集記事の一部である。

(62) 「大連日支人 職業の盛衰」(7) (『満州日日新聞』1926年11月23日付)。

として働いて居るものが約四十人で両者を合せても百人には達しない、ところが支那人職人は少くも三百名を越えて居る⁽⁶³⁾』という中国人優勢の状況であった。中国人による洋服商の開業は、1910年頃からみられ、ロシア治下で仕立技術を修得した者、日本人商人の下で年期奉公徒弟であった者が、この頃から洋服商や洋服仕立職人を始めた。しかし、1910年代末の好況期には、大連の日本人は中国人職人に洋服を注文する者はほとんどいなかったが、1920年恐慌後、中国人職人の台頭と洋裁技術の向上がみられるようになったという。すなわち、「……財界の急転直下以来漸く支那人職人の技倆も上達し顧客の懐具合に乗じてより安くより善く供給するようになって今日の主客顛倒を現出するに至ったものである、殊に上海系の洋服商は邦人に比して優るとも劣らぬものをつくり在連西洋人の殆どがこの上海系の商店に注文して居る事実から見ても到底今後邦人が問屋も経営者も職人も旧態に復する時は望まれないであろう……⁽⁶⁴⁾」。こうして、銀価の低落傾向のもと、力をつけた中国人職人・商人が、洋服の製作・販売の領域で、日本人商店・職人の地位を蚕食しつつあったのである。

〔ペンキ塗工〕

かつては日本人の独占状態にあり、1920年代にその主導権が中国人に移った職種の典型的事例として、ペンキ塗工職が存在した。1926年10月時点の大連のペンキ塗工職人は、「邦人側二十三戸、支那人側三十二戸で経営者の上から見ては約十^万の差に過ぎないが、これに使役される職人に至っては邦人の十人に対して支那人は定雇のみにも百人を超越する圧倒的多数⁽⁶⁵⁾」を占めていた。こうした中国人のペンキ塗工への参入は、ここ10数年間に生じた出来事であった。「大正元年当時の実状は、邦人約十六戸に邦人職工三十名内外のものに過ぎなかったが、(第一次大戦期の)建築激増につれて一時に殖^え、手不足から支那人を使用することゝな^つた⁽⁶⁶⁾」。塗工の仕事は修得が容易で、絵看板の作成などに限定されていたため、日本人の独占はただちにくずれた。「賃金は安く(邦人に対して約三分の一)習業が容易であるために大正八年には僅に二戸しか経営者がなかった支那人が⁽⁶⁷⁾幾何も経ぬ今日戸数に於ても邦人を凌ぎ更に従業職工は上述の如く殆ど独占するに至ったもの」である。

〔大工職〕

ペンキ塗工職とほぼ同様に、大工職においても中国人の進出が顕著であった。まず1926年10月の現状をみると、「現在邦人職人中少くも三四名以上の支那人大工を使役して居る所謂棟梁は約百名で、この外に建築の時期によって転々する特殊性の多分にある職人が……三百人内外居り、これに

(63) 同上記事。

(64) 同上記事。

(65) 同上「大連の日支人 職業の盛衰」(8)(同上紙, 11月25日付)。

(66) 同上記事。

(67) 同上記事。

対して支那人職工が千名内外あって邦人は約四割であ」⁽⁶⁸⁾った。

日露戦争後の大連統治開始直後には、中国人職工が中国人家屋建築にあたり、日本人大工が日本人家屋建築を担当するという民族間分業が明確に存在していた。しかし、大連在留日本人の増加により、日本人大工も620人～630人に増加したものの、なお不足となったため、「労銀の安い支那人職工を補助として使用することゝなり、潮の如く邦人の域を摩することゝなった」。「思慮」「分別」の欠如した日本人職工は、「日本式技術の上達にまかせて根強く肉迫して来る支那人に対抗しやうとの気概もないのか押されるまゝに押し流されて奥地へ奥地へと移動し」た結果、620人以上いた日本人大工が、1926年にはわずか300人内外になったといわれる。その結果、「床、違ひ棚、欄間等の細工物」はいまだに日本人大工職工の独占であるが、建設工事において「材料代を除いた大部分の支出である工賃は、殆ど実際に於て支那人職工の手に納められる状態」⁽⁶⁹⁾となった。こうした中国人職工の台頭の結果、日本人職工の職業モラルにも変化が生じた。すなわち、「邦人職工が全部が技倆の如何にかゝらず遮二無二棟梁乃至監督たらんことをつとめ自ら技倆を研ぐ」⁽⁷⁰⁾という大工の将来展望とむすびついた気風がすたれつつあることを、「大連日支人 職業の盛衰」は指摘している。

〔露天商〕

中国人商人の台頭は、露天商においても見られた。たとえば、大連市内の繁華街である浪速町の露天商は、1916年に45人、1918年に150人、1926年に355人に膨張した。⁽⁷¹⁾1922年に日本人166人、中国人187人であった構成比は、1926年には、日本人149人、中国人206人と一層中国人優勢となった。日本人露天商で多かった営業科目は、履物商10店、「巴焼饅頭」販売8店、メリヤス類販売商9店、古本屋8店、などであるのに対し、中国人露天商では、メリヤス販売商28店を筆頭に、「花卉」販売22店、金物雑貨商20店、靴商20店、絹紬商15店の順であつた⁽⁷²⁾（1923年大連警察署の調査）。

1926年10月調査では、このほか、食料雑貨商・塗物業・洗濯業・理髪職・金銀細工業・綿打業・日本料理・畳屋及畳職人・左官職などにおける日本人と中国人の勢力比が記述されているが、大半の営業科目において、1920年恐慌後中国人職人・経営者の進出がみられるようになり、大連日本人の日常生活領域に中国人が食込んでいく状況を指摘していることに注目しておきたい。

(68) 同上「大連の日支人 職業の盛衰」(10) (同上紙, 11月27日付)。

(69) 同上記事。

(70) 同上記事。

(71) 同上「大連の日支人 職業の盛衰」(14) (同上紙, 12月2日付)。

(72) 同上記事。

(3) 特産物貿易商の不振

大戦好況期に満州の特産品である、大豆・大豆粕・大豆油などの大連港からの輸出が急増し、日満貿易や日欧貿易に従事する多くの商人層が出現したことは、末尾の付表からもうかがうことができる。しかし、1920年代に入ると、大連の代表産業である特産物輸出業・大豆関連品製造業にも深刻な不況が到来した。前述した〔第3表〕に掲載されている小寺荘吉、中島常次郎、上野倫などの業績悪化は、こうした特産物貿易業者の動向を象徴的に示すものであった。

ここでは、大連における特産物貿易業の不振とその要因を考察してみよう。

1925年現在、大連重要物産組合には、38商店が加入（うち7商店は中国人商店）していたが、そのうち日本人企業でみるべき業績をあげていたのは、日清製油⁽⁷³⁾（代表・古沢文作）、三泰油房（代表・広瀬金蔵）、三菱商事大連支店（代表・島田千代松）、⁽⁷³⁾ 榊鈴木商店大連支店（代表・平高寅太郎）など大手4社と瓜谷商店（代表・瓜谷長造）にほぼ限定されていた。1910年代後半に発展した中小特産物商店の大半は、大豆油の過剰生産、大連取引所投機への参入とその失敗、日本内地（神戸）本店の業績悪化と対外負債の増大などの諸要因によって、休業や事業縮小に追い込まれていた。すでに3人の特産物貿易商の衰退過程については前述したので、ここでは、付表で（Ⅰ）「発展型」に属する永順洋行（太田伊之助）と、（Ⅱ）「現状維持型」に属する油谷商店（油谷万次）をとりあげ、両商店においても、特産物貿易業では多大な損失を蒙っていたことを示しておこう。

永順洋行は、1905年開業以来綿糸布、雑貨、特産物を主体とする日満貿易に従事し、「綿糸布」「雑貨」「染料」「特産物」「銭鈔」の5部にわたる貿易金融業務を展開していた。このうち特産物部は、1913年の開業にかかり、大連取引所重要物産取引人として、好況期には年間1600車内外の取扱いを行ったが、「先年同店の別働隊たる昌凶会社の蹉跌以来業績旧の如くならず昨年度（=1924年度）は豆粕約百六十七車、大豆約五百九十四車、雑穀約四十車合計八百一車を取扱ひたるに過⁽⁷⁴⁾ぎ」なかった。

合資会社油谷商店は、当初神戸の貿易商油谷商店の大連出張所として設置され、店主重蔵の長男万次が店務を担当していた。だが、1920年恐慌の際、定期思惑取引の失敗により、巨額の損失を計上し、取引先にも負債を背負った。その負債は「到底返済の見込みなき」状況なので、主要な債権者を社員とする合資会社に改組し、1924年には大連に本店を移した。⁽⁷⁵⁾では、大連本店（以前は大連支店）の営業状態は、どのようであったか。

大連本店は、ハルビン、長春、開原など満鉄沿線都市で大豆・豆粕・雑穀を仕入れ、これを長崎、

(73) 「大連特産商興信録」「大連之部」（日清興信所編『大連特産事情』下巻，1925年，所収）1～79頁，参照。

(74) 「永順洋行」（同上「興信録」58頁）。（ ）内は引用者。

(75) 「合資会社油谷商店」（同上「興信録」64頁）。

鹿児島、神戸など日本内地や青島、上海方面に輸出する貿易業務を展開していた。1920年代中葉の油谷商店の営業振りは、次のように決して順調とはいえなかった。「大正十二年度は約五百車此金額百二十五万円内外を取扱ひたるも昨年度は前半の震災により打撃を蒙り内地方面よりの注文少なく為めに取扱高も約二百車此金額五十五万円見当に減少し漸く手一杯の業績なりしが本年も亦一般の不況にて取引捗々しからず、店舗を維持する程度の業態に過ぎざるが如⁽⁷⁶⁾」しという状況であった。このように、(I)「発展型」や(II)「現状維持」型商店であっても、特産物貿易業の場合、投機取引の失敗、大連取引所建値問題の影響、龍口銀行休業問題の打撃、さらに日本内地需要の停滞などの諸要因により、取引額を減少させたり、休業直前に至る商店が数多く含まれていたことを留意しておきたい。特産物貿易業は、1920年代の大連日本人経済界の不況を最も代表する業種の1つであったといえよう。⁽⁷⁷⁾

では、1920年代末における特産物貿易業はいかなる業績を示したのであろうか。ここでは、その手がかりとして、『昭和五年大日本商工録』における「貿易業（代理・仲立）」の営業税上位納税者をみてみたい。注目されることは、「三井物産3万6406円」「三菱商事8500円」が1、2位を占めているものの、3位から15位までは、すべて中国人貿易商が上位を独占しており、ようやく16位に大倉商事^(株)（1829円）、17位に勝間良太郎商店（1744円）が顔をみせるにとどまっている⁽⁷⁸⁾。周知のように、1920年代末には、北満大豆のウラジオストック輸出の増大や張学良政権による大豆買占め政策の展開などにより、一部の貿易商社をのぞく大半の日本人特産物貿易商が窮状に陥っていたのである⁽⁷⁹⁾。大連の基軸産業である特産物貿易業の不振と日本人貿易商の衰退は、政商的「地場」企業家層の没落や卸・小売商の経済的窮迫化とあいまって、大連日本人経済界全体の「権益危機」意識を醸成していくことになる⁽⁸⁰⁾。

4. おわりに

本稿では、1921年時大連商業会議所会員の営業動向を手がかりとして、大連日本人商工業者の衰退過程を考察してきた。大連商業会議所会員316人の中から、大企業支店長層をのぞく258人（275

(76) 同上記事、65頁。

(77) 大連商工会議所『大連特産市場不振の原因とその対策』1929年、を参照。

(78) 「貿易（代理・仲立）」（大日本商工会編『昭和5年版大日本商工録』）8～9頁。

(79) 大連商工会議所編、前掲書、小林英夫「満州事変前の金融構造」（満州史研究会『日本帝国主義と満州』御茶の水書房、1972年）、を参照。

(80) 前掲拙稿「構造と活動」347～349頁。なお、日本人小売業者の経済的窮迫化とその歴史的意味については、拙稿「1920年代『満州』における日本人中小商人の動向」（『土地制度史学』第92巻、1981年7月号）を参照のこと。

社)を抽出し、それを営業税額の変遷より、4つのタイプに分類すると、(I)「発展型」103人、(II)「現状維持型」41人、(III)「業績悪化型」41人、(IV)「閉店・休業型」73人となる。このうち、(III)と(IV)の114人の営業者の、好況期から1920年代への推移をみたのが、[第2表]から[第6表]であった。1920年代に業績不振に陥る営業者は、①1910年代末の企業ブーム期に数多くの新設企業の設立に関与し、20年代初頭にその諸会社の整理・廃業に直面するタイプ(「好況期企業投資型」実業家)と②1920年代の大連日本人経済界の不況により、自らの営業が業績不振に陥るタイプ(「本業業績低迷」型営業者)の2タイプを中心としながら、さらに③業績不振や多企業投資の失敗の帰結として、営業停止・企業閉鎖に追い込まれる営業業者や④営業科目の転換・重心移動を行うもの、⑤日本本国への帰国や日本「内地」事業への営業重点移動を行う者などがみられることが判明した。

一方、1920年代の日本人企業の業績悪化には、いくつかの業種別特徴もみられた。付表「1921年6月大連商業会議所会員」が示すように、業績悪化がとくに顕著にみられたのは、銀行業、株式取引業、特産物貿易業、油房業、海運業などの部門であった。これらの業種の業績不振のメカニズムは、次の3点にまとめられよう。

第1に、1910年代末の株式ブームに参入して、多会社設立に関与した結果、1920年代にその多会社投資の業績悪化・休業に直面し、「バブル」経済期に形成された不良資産の整理や株式・不動産暴落のために本業の縮小や休業、機関銀行の休業を余儀なくされた営業者のタイプである。

第2に、特産物貿易業に典型的にみられるように、商品・株式の投機的取引の破綻や1920年代の市場環境の変化、さらに日系金融機関の休業・破綻などにより、負債を増加させたり、運転資金調達難・販売不振を深刻化させ業績不振に陥ったケースである。

第3に、日本人の各種職人や小売商・露天商においてみられる業績不振のメカニズムとして、日本人経営者から技術の継承をうけた中国人同業者の台頭と、独自の流通ルートと低コストでの商品仕入、低賃金雇用による日本人商人・職人の経済的衰退があげられる。

1920年代の大連日本人商工業者は、以上のごとき諸要因によって、業績不振や休業・事業閉鎖に陥ったのである。かかる日本人経済界の不況は、1930年代初頭関東軍による満洲侵略とその帰結としての「満州国」建国、⁽⁸¹⁾「満州ブーム」の出現まで継続していくことになる。

(81) 本稿における考察結果が、日露戦後に開始される日本人の大連進出と、大連日本人社会の展開過程において、いかなる意味をもつかについては、柳沢遊『日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史——』青木書店、1999年、の「第3章」および「おわりに」をあわせて参照されたい。

付表 「1921年6月大連商業會議所會員」

25年非會員…118人

氏名(25年)	商店名	營業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 營業税(1)	25年(D) 營業税(2)	30年(D) 營業税(3)	30年(T) 營業税(4)	盛衰 タイプ
石本鎮太郎	和盛公司, 大連教育銀行, 湯川麦酒	貿易商, 銀行業, 醸造業	3,5,9 →6	1742	—	143.25(貸家) 7.5(鉄砲)78.0(銀豆 行)496(豆油, 粕)174(兩替)	3524	—	(貫一)30~50	IV
今津十郎	大連商業銀行, 今津商店	銀行業, 木材商	4,7→ 4,×	495	928	195.0(貸家) 198.0(銀行) 6.0(木材) 33.0(金物)	—	6324	—	IV
石田栄造	大信洋行	銅,鉄,金 物商	6→5	47	—	409.5(金物) 20.25(貸家)	—	760	550~1000	I
井上伊次郎	誠昌堂薬局	薬種	6→×	—	134	259.5(薬品) 31.25(貸家)	—	—	150~200	III
井上輝夫	満洲製麻	製麻業	6→6	31	70	—	—	2371	4500	I
井口良香	巖城商会	綿糸布貿易 商	7→7	—	—	108(大豆) 156.0(綿糸布) 78.5(貸家)	—	256	1500(特産物)	I
石川万次郎	石川万寿堂	薬品, 薬種	8→×	165	47	73.5	955 (株式)	49	30~50	III
今中良	今中洋行	小間物商	8→8	—	31	49.5(小間物)	—	123	80~100	I
今井行平	東洋スレー ト工業	スレート石材 販売工事請負	8→8	36	38	9.0(左官, 請負— 今井光太郎)	—	562	450~550	I
池内新八郎	池内建築部	土木建築業	8→8	71	101	275.0	400	274	250~300	II
伊藤長之助	伊藤呉服店	呉服商	9→8	109	162	72.0	673	860	550~1000	I
池田桑作	福来支店	両替, 貿易	9→×	—	—	—	—	—	—	IV
岩佐義一	岩(岩佐商店)	生魚商	10→9	59	82	57.0(魚) 17.5(貸家)	—	100	80~100	I
石光幸之助	石光洋行	金物商, 建築請負	10→9	136	營業税 1348	22.5(貸家)	90	—	—	I
今村貫一	日満商会	鉄砲火薬商	10→8	71	—	18.6(鉄砲他)	45	171	100~150	I
磯田常次郎	光明洋行紙店	和洋紙商	10→10	71	70	109.0	341	180	150~200	I
岩崎文五郎	岩崎回漕店	回漕業(物 品販売業)	10→10	—	—	49.0(運送)	—	—	—	IV
長谷川 潔	三泰油房	豆油, 油脂工業	3→5	36	—	752(豆油) 20.5(貸家)	—	—	1000~2000	II
原田猪八郎	原田組	金物船具, 機械油	5→5	253	343	552(金物)45(機 械)33.25(貸家)	—	10110	550~1000	I
濱竹松	濱恒支店	材木商	6→6	331	406	150.5(材木) 176.75(貸家)	578	418	300~380	I
原田光次郎	原田洋行	貿易商(酒 商)	6→6	(山 県 通)253	—	39.0(日用雜貨防 水布)	—	—	80~100 (満洲清酒)	II
濱崎彌助	濱崎商店	薬種貿易商	7→8	136	—	105.0(薬) 23.25(貸家)	—	889	250~300	I
長谷川辰次郎	長谷川組	土木建築業	7→6	253	162	500.0(土建) 22.5(貸家)	1950	1506	1000~2000	I
濱井松之助	大阪屋号書店	書籍文具店	8→7	83	—	162.0(図書, 文房 具)	380	592	30~50	I
幡田義之助	満洲石鹼	石鹼製造業	8→×	—	—	24.0(石鹼) 26.0(貸家)	—	101	100~150	I
畑中佐太吉	畑中商店	洋釘, 鉄, 雜鉱商	8→7	—	205	133.5(金物)	484	547	450~550	I
早野重右衛門	早野材木店	材木荒物商	8→10	109	108	52.5(材木, 荒物) 7.75(貸家)	124	70	50~80	II
原田栄治	日栄商会	機械金物, 空びん商	8→×	47	—	67.5(金物)	191	—	—	IV
西川光太郎	西川光太郎 商店	輸出入貿易 商	8→×	136	82	159(器具, 自動車) 445(貸家)	—	[728]	—	III
西片朝三	満洲日日新 聞社	諸印刷業	8→10	83	—	140(印刷, 製本)	—	—	380~450	I
丹羽幸三郎	丹羽商店	特産物商	9→×	109	—	55.0(大豆など)	699	—	—	IV

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
堀内敬壽郎	堀内商店	諸紙, 雑貨商	8→8	83	82	38.25(文具, 紙) 186.75(貸家業)	113	113	100~150	I
彭城得	大連運輸商会	運輸業	10→×	—	—	—	—	—	—	IV
土橋義助	大連質業(株), 土橋洋行	質屋業, 古物商	8,8→8	—	162	57.0(質屋業) 25.5(貸家)	—	1024	—	I
鳥羽実	鳥羽洋行	機械器具材 料販売	8→8	109	246	30.0(金物) 273.0(金物建材) 24.5(貸家)	943	—	250~300	II
鳥羽京治	深尾商店	ガラス商	10→×	—	—	108(深尾ユキエ)	39	68	50~80	III
千村春次	千村商店	度量衡器商	8→8	164	70	30(器械) 459(金物, 度量衡) 97.0(貸家業)	530	68	150~200	III
劉心田	遼東銀行	銀行業	4→×	—	—	264.0(銀行業)	—	3038	—	I
小澤新之輔	大連取引所 信託(株)	取引所信託 業	2→1	71	—	—	—	—	—	III
太田伊之助	永順洋行	綿糸布貿易 商	4→×	36	134	180.0(鉄工業) 414.0(綿糸布) 177.75(貸家)	1683	754 (長井)	550~1000	I
大神九八郎	大連貯金(株), 大神質店	金融業, 質屋	8,5→6	136	—	510(金銭周旋) 93.0(質屋業) 63.0(金銭貸付) 30.0(貸家)	—	—	—	IV
小澤太兵衛	新隆洋行	豆油容器商	5→5	581	572	150.0(あきかん) 128.0(貸家)	265	—	100~150	II
丘襄二	田中商事(株) 出張所, 山東興業(株)	貿易商, セメント製 造	5,8→5	31	—	25.0(船舶) 7(倉庫業)	—	—	—	IV
岡田徹平	大連油脂工 業(株)	油脂工業, 酸素製造	5→10	—	—	—	—	1312	550~1000	I
大庭仙三郎	大庭商会	土木建築請 負業	7→7	208	134	700.0(土建) 137.0(貸家)	500	174	150~200	III
太田信三	小林又七支 店	印刷業	7→7	164	205	150.0(印刷) 75.0(紙, 文具) 60.0(貸家)	670	760	550~1000	I
小川慶治郎	大連醬油(株)	醬油, みそ, 醸造業	7→7	164	162	51.0(醬油), 132.75(貸家)	—	367	250~300	I
岡崎忠雄	岡崎汽船(株)	海運業	8→×	—	—	—	—	—	—	IV
奥村千吉	奥村洋行支 店	質業, 古物 商	8→8	208	250	30.0(古物) 252.0(質屋) 11.5(貸家)	—	—	—	III
岡田敬五郎	松浦屋	諸紙, 文具, 印刷業	8→×	—	—	205.5(文具, 紙) 45.0(印刷) 21.25(貸家)	512	—	—	IV
大町登佐	志岐組	土木建築請 負業	8→×	—	—	360.0(建築)白川組 3.75(鉄砲) 97.5(貸家)	905	228	300~380 (志岐信太郎)	III
岡本重平	近商組	ロープ, 蚊 帳, 畳表	9→×	361	—	111.0(畳表, ロ ープ)	333	—	250~300	I
太田豊彦	太田豊彦商店	荒物雑貨商	9→10	—	—	64.5(荒物)	—	—	—	II
岡崎森之助	山喜商店	米穀商	9→×	71	—	117.0(米), 11.5(貸家)	84	62	50~80	III
落合実	東亜図書(株)	図書出版, 運動用具	9→×	—	—	10.35 (玩具—落合又七)	—	—	—	IV
大羽豊治	日本貿易商会	鋳業	10→×	31	—	10.75(貸家)	—	—	—	III
太田治郎	大連牛乳(株)	牛乳製品商	10→×	—	—	189.0(牛乳)	—	170	150~200	II
大原計三郎	大原洋行	食料雑貨商	10→10	36	39	48.75(食料雑貨)	94	—	0~30	III
大村孫三郎	大成洋行	綿糸布商	10→×	—	—	—	—	—	—	IV
和気利三郎	節辰馬商会	海運業, 清 酒販売	6→×	—	—	97.5(酒)	—	2425	150~200	I
和田篤朗	満州殖産(株)	特産物販売 委託	8→×	31	—	86.4(金銭貸付) 34.5(貸家) 324.0(米)	—	—	—	IV

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
和田正一	京和洋行	食料品商	10→9	47	39	64.5(酒)	389 (たね)	219	250~300 (食料品雑貨) 50~80(米穀)	I
和田猪三郎	外海洋行	海産物蔬菜 類商	10→10	47	70	63.0(酒) 4.75(貸家)	169	—	100~150	I
川澄末吉	正隆銀行	銀行業	2→×	83	—	1,140(銀行)	—	25002	—	I
河辺勝	松茂洋行	海陸運送業	4→6	331	—	600(船舶) 41.25(貸家)	300	750	—	III
金子隆二	大連製油(株)	製油, 油粕 (のち電気器具)	5→8	36	—	41.75(貸家) 1920年設立	—	—	—	IV
神成季吉	周水子土地 建物(株)	不動産売買	6→3	109	—	—	—	—	—	III
河盛恒次郎	河又出張所	米穀醬油商	7→7	759	572	226.5(醬油, 酒) 93.0(食料品) 275.0(貸家業)	482	147	100~150	III
川上統太郎	登喜和商会	金物, 電気 器具, 機械 輸出入商	7→8	253	—	237.0+105.0 (金物, 電気) 211.0(貸家業)	1982	162	50~80(代理業) 80~100(電気)	III
河村統治	河村商店	薬種商→土 建	7→×	71	70	18.0(薬品) 99.25(貸家)	—	516 (大同組)	550~1000 (大同組)	I
加藤定吉	加藤洋行	土木建築請負業 雜貨商(貿易業)	7→8	—	247 (営業税)	— 17.5(貸家)	8241	340	—	I
河合美雄	近江洋行	時計商	8→8	131	162	156.0 (時計貴金屬)	639	249	150~200	I
樫村フジ	樫村洋行	写真機械, 時計商	8→8	—	39	171.0(時計)	—	—	—	III
加藤吉五郎	加藤金物店	金物商	8→×	—	33	105.75(金物) 40.25(貸家)	—	—	—	IV
海江田新之丞	海江田兄弟 商会出張所	特産物商	8→8	—	58	99.0(豆粕) 23.75(貸家)	432	301	150~200	I
加地兼次郎	近江屋呉服 店	呉服商	8→×	—	—	174.0(呉服)	763	—	200~250 (宇治原)	I
川村義郎	貸家業	貸家業	10→10	31	—	130.5(貸家)	—	—	—	III
川上賢三	満州機械工 業(株)	機械売買設 計・請負	8,10 →×	—	—	165.0 (満州貯金信託)	—	—	—	IV
勝俣喜十郎	満州牧場	牛乳商	10→9	—	250	43.5(牛乳) 24.0(貸家業)	124	200	200~250	I
金子八朔	筒馬場商会	米穀商	10→×	—	—	129.0(米, 醬油, 木炭)	—	—	—	IV
吉倉注聖	遼東新報社	新聞発行	8→×	—	—	4.0(吉野直治)	—	—	30~50	I
横山力一	長崎屋	呉服商	8→×	—	—	184.0	—	—	50~80	III
吉田辰五郎	大東公司	貿易商 (石炭)	9→10	—	—	118.5 (石炭, 大東公司)	372	40	50~80	III
吉本政吉	吉本商店	麻袋商	9→7	47	30	75.0(麻袋)	600	608	1000~2000	I
米山福造	米山商店	食料品雜貨	10→9	4×(?)	47	33.0(食料品)	—	—	100~150	I
吉本吉太郎	吉本商店	麻袋, 麻布商	10→×	—	—	—	—	—	—	IV
高田友吉	(株)進和商会, 大連機械	金物船具商	5,5 6→6	36	250	1135.5(金物, 鑄 物)64.5(貸家)	—	1781	550~1000	I
田中繁次郎	田中東亜 東亜商事(株)	倉庫業, 有 価証券	6,7→7	253	—	142.75(貸家業)	—	—	—	IV
高岡又一郎	高岡組, 工事部	土木建築請 負業	7→×	109	246	400.0(建築)	2450	1343	1000~2000	I
玉谷隈吉	玉谷洋行 商事信託(株)	土建業, 有 価証券販売	8,7→ ×	83	—	108(豆粕, 豆)	300 (大豆) 1157 (株式)	—	—	III
田中安之助	伊勢作洋行	酒, 醬油, 食料品商	7→8	136	—	210.0(酒, みそ)	524 (酒)	—	—	III
多田勇吉	大連信託(株), 多田工務所	信託業, 土木建築	7,8→7	136	58 (耕一)	168.0(貸家業) 30.0(石材)	472 (工務所)	421	200~250	I
田中重太郎	徳隆公司	海運, 鉱業	7→×	31	—	144.0(船舶)	—	—	—	IV

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
辰巳銀二	内外興業(株) (24年辰巳商店)	欧米建築材料 直輸入商	8→10	—	—	72.0 (建材, 自動車)	—	33 (代理)	—	III
袋布要太郎	②茶舗	茶商	8→8	83	162	57.0(茶) 48.75(貸家)	188	141	150~200	I
武田正吉	鶴田号	石炭商	8→×	59	82	55.5(コークス) 105(貸家)	323	445	450~550	I
武田晴太郎	(筒栄商会)	蓄音器	8→×	—	—	39.0(蓄音器)	90	—	200~250(選一)	I
高橋峯次郎	高橋峯次郎 商店	骨董商, 貸 家業	8→8	253	250	20.25(骨董) 257.25(貸家)	—	—	30~50	II
竹田保	東洋商事(株)	商品売買, 仲介委託	8→×	—	—	—	—	—	—	IV
田淵紋次郎	大谷藤七支 店	食糧雑貨, 青物果実	10→10	83	82	62.25(食料品) 27.15(貸家)	49 (荒一)	304	250~300	I
谷崎百蔵	谷崎商店	木材商	10→×	109	—	280.0(貸家業)	—	—	—	IV
竹下市次郎	竹下商店	印刷業	10→10	47	31	125.75(印刷)	100	111	80~100	II
武内宗一	武内洋行	絨地洋服商	10→×	—	—	66.0(羅紗)	—	95	100~150	II
玉置竹次郎	玉置硝子製 造所	ガラス製造 業	10→×	—	—	20.0(ガラス器)	—	45	—	II
莊国四郎	大連モルタ ル(株)	モルタル製 造	7→×	—	355 (徳和公司)	25.0(石灰) 165(洋服)	35.0	—	50~80	III
莊伴治	徳海屋	羅紗洋服商	8→7	136 (晋一)	205	381.0(絨, 洋服)	633 (晋一)	535	450~550	II
塚本貞次郎	大連汽船(株)	海運業	2→2	71	134	355.6(船舶)	—	37196	2400	I
津村甚之助	大連銀行	銀行業	3→×	71	—	399.0(河辺勝)	—	—	—	IV
坪井義造	南満鉱業(株)	鉱物採掘業	5→×	—	—	—	—	742	300~380	III
角田鶴吉	角田呉服店	呉服商	8→×	164	—	319(相本屋呉服店) 93(貸家)	—	—	—	IV
土田寛一	土田写真館	写真撮影	10→9	—	58	75.0(写真)	270	153	100~150	I
彌宜田 喜代治郎	彌宜田商店	食料品商	9→×	164	162	201.9(食料雑貨) 10.5(貸家)	622	311	300~380	I
中村樽次郎	加納合名会 社支店	酒, 雑貨商	6→6	71	108	294.0(酒) 16.0(貸家)	—	649	450~550	I
中島常次郎	直木洋行	特産物輸出 商	7→×	—	—	210.0(大豆 山本為吉)	—	—	—	IV
中村敏雄	宅合名会社 支店	酒, 食料雑 貨	7→7	331	1,200 (営業税)	145(洋食品, 酒)	—	605	300~380	I
永井雄之進	永井雄商店	重要物産取引 人	7→×	—	39	90(大豆, 豆粕)	—	—	150~200	I
中村与資平	日米公司	直輸出入商	8→×	83	—	60.0(建築材料)	—	—	—	IV
中村彦一郎	範田商店	輸出入, 建 築材料商	8→×	43	—	182.5(船舶)	56	—	—	IV
中村栄吉	中村商店	食料品卸商	9→×	136	82	174.6(食料) 29.25(貸家)	338	296	250~300	I
中島米太郎	中熊商会	材木商	9→×	—	186 (辻周一)	85.5(材木)	—	44	200~250 (中熊合名)	I
永田善三郎	永田鉱業(株)		10→×	31	—	—	掲載	—	—	IV
中川三七	満蒙興業(株)		10→9	—	—	—	—	—	—	III
中川竹太郎	中川商店	鉄材商	10→×	47	—	120.0(古鉄, 機械)	256	—	—	IV
中村松之助	中村商店	鋼材, 金物, 石炭, 煉瓦	10→9	59	—	8(船舶) 33.0(石炭, 金物) 24.75(貸家)	66	100	30~50	II
村田峰太郎	村田商店	海産物商	8→8	136	70	67.5(海産物) 28.5(貸家)	165	116 (四圍・ミツ)	250~300	I
村井隆治	村井材木店	材木商	8→×	136	250	63.0(材木) 140.25(貸家)	21	64	50~80	II
村尾敏一	村尾汽船(筒)	船舶海運業	8→8	—	—	—	—	—	—	IV
村山瀧三郎	村山製穀所	麦粉, 砂糖 商	8→×	—	—	45.0(麦粉, 砂糖) 98.5(貸家)	—	—	—	IV
向井龍造	満蒙殖産 (株)	畜産, 特産 物, 肥料	8→7	36	—	34.0(骨灰肥料)	—	—	450~550	II

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
村田孫左衛門	村田商行	綿布太物商	9→×	184	—	196.0(綿)	—	214	150~200	II
村上寅造	村上商店	米穀石炭商	9→9	264	31	45.0(米, 薪) 141.0(貸家)	88	81	50~80	III
瓜谷長造	瓜谷商店	特産物商	6→5	208	928	108.0 (石炭, 豆油, 大豆)	240	780	3100	I
上中 治	満州貯金(株)	金融業, 酒 (扶桑号)	8→8	136	108	64.5(酒) 20.5(貸家)	199 (龍男)	—	50~80	II
植木藤藏		製 剂	8→×	—	—	13.0(貸家)	—	—	—	IV
上野 倫	満州共益社支店	輸出入貿易商	8→×	—	—	—	—	339	380~450	III
白井熊吉	白井洋行	特産物商	8→×	83	—	334.0(大豆, 骨灰) 145.25(貸家)	—	—	—	III
内山善之助	内山洋行	和洋雜貨卸 商, 写真業	10→10	59	—	57.75(雜貨)	150 (写真)	—	100~150 (金之助)	I
上田正喜	上田商店	代弁運送業, 汽船	10→×	—	—	27.0(運送)	—	485	550~1000 (植田)	I
野津孝次郎	泰来錢莊, 日華証券信 託(株), 星ヶ浦 土地建物(株)	両替業, 証券信託, 不動産業	5,6→ × 6→8	1332	—	165.0(両替) 340.5(貸家)	掲載	—	—	IV
野田興七	西海洋行	木炭, 米穀, 豆油容器商	9→×	—	—	55.5(炭, 米) 68.5(貸家)	—	—	30~50	III
能登庄三郎	能登洋行	度量衡器商	9→9	71	108	75.0(度量衡器) 60.5(貸家)	187 (機械工具)	—	150~200	I
黒崎真也	大連錢鈔信 託(株)	錢鈔信託	2→3 (神成)	36	—	—	—	633	—	IV
黒田兵次郎	共同汽船(株)	海運業	6→6	—	—	32.8(船舶) 54.75(貸家)	—	727	450~550	I
久保田勇吉	久保田組 (のち岡組)	土木建築請 負業	6→×	253	—	42.0(木材) 700(土建) 148.5(貸家)	1590 (所)	1000 (岡組)	1000~2000 (岡組)	I
久保章一	久保洋行	金物商	8→10	109	70	132(木材, 竹材) 10(貸家)	127 (金物)	—	80~100	II
黒川太吉	黒川太吉商店	海軍用達海 産物商	10→10	—	—	—	—	—	—	IV
久保通猷	久保商会	鉄材, 木材, 建築用品貿 易業(染色)	10→10	—	—	156(土木建材)	—	—	—	IV
楠 正彦	久壽屋質店	質屋業	10→×	31	—	107.5(貸家業) 60.0(金銭貸付)	—	—	—	IV
桑島豊重	満州薬業(株) 日本橋ホテル	旅館, 貸家業	10→10	36	58	87.5(ホテル) 17.75(貸家業)	—	534	200~250	I
山田三平	山田三平商店, 大連株式信 託(株)	両替業, 麻 袋, 鉄砲, 火薬業	4,4→ 4,×	1332	405	444.25(貸家業) 60.0(錢莊) 156.0(麻袋) 36.0(金銭貸付) 365.5(ホテル) 2.25(鉄砲)	1071 1776 (柳治)	847 (ホテル) 457(錢莊) 235(柳治) 1076(不動 貯金)	—	III
山口金次郎	大連土木建 築(株)	土木建築請負, 信託, 木材	7→×	—	—	180.0 (岡田時太郎)	掲載	—	—	IV
山岡富藏	志摩洋行 (鈴木新五郎)	米穀商	8→8	174 (鈴木)	—	180.0(米穀) 195.75(貸家)	515	442	380~450	II
山本神助	大正コンク リート(株)	鉄筋コンク リート設計 請負	8→×	—	—	700.0(土木建築, 久保田) 148.5(貸家)	1590 (久保田)	769 (久保田)	—	III
矢中快助	矢中商店	建築材料	8→×	—	—	46.5(建材, 薬品)	43	—	—	IV
山本虎一	旭煉瓦(株)	煉瓦製造	8→×	—	—	20.0(煉瓦)	—	—	—	IV
山崎清吉	山崎運送店	運送, 新聞	8→×	71	82	86.0(運送) 14.25(貸家)	64	56	—	III
柳本徳一	柳本呉服店	呉服商	9→×	47	50	94.50(呉服)	—	261	200~250	I
山崎平次郎	山 平	魚 商	10→×	136	108	154.00(魚介) 39.5(貸家)	—	234	150~200	II

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
矢野健次郎	矢野商会	土木建築請負	10→×	31	39	200.00(建築)	掲載	—	250~300	II
山下末郎	山下鉄工所	機械器具製造	10→×	—	—	50.0(鉄工)	100	掲載	—	IV
山田徳之助	山田商店	建築材料商	10→10	—	—	18.0(建築材料)	48 (徳三郎)	—	—	IV
山根哲次郎	(資)東薬房支店	薬種売薬	10→×	—	—	144.0(薬品)	—	105	200~250	I
榊田憲道	大連工業(株)	雨覆, 被服, 家具装飾品 (家具)	6→6	—	—	—	—	1016	1000~2000	I
松村久兵衛	大連倉庫	倉庫業	6→6	581	572	156.0(貸家業)	36	156	80~100	II
松島久次郎	松島商店	板ガラス厚 鏡商	7→6	164	250	54.0(機械) 171.0(ガラス) 125.5(貸家)	571	221	450~550	I
松沢万三人	(資)島松商店	薬種諸機械 商	8→8	—	230	111.6(薬品) 54.0(器械)	掲載	—	250~300	I
松岡庄助	満州自動車 (株)	自動車, 自 転車, 車商	8→8	59	—	93.0 (自動車, 自転車)	掲載	180	250~300	I
松浦与三郎	営口煉瓦製造 所大連工場	煉瓦製造業	8→7	—	—	215.0(煉瓦)	505	512	550~1000	I
松内亀太郎	松内楠陽堂	薬種商	9→8	83	39	84.5(売薬) 18.0(貸家)	—	90	—	II
松田隆市	松田洋行	特産物商	9→9	83	—	105.0(大豆, 豆粕) 16.0(貸家)	—	119	150~200	II
前沢三郎	前沢商行	金物商	10→8	71	205	105.0(金物)	561	—	450~550	I
前田嘉之治	前田洋行	工業用品商	10→×	—	—	126.0(荒物) 13.0(貸家)	204	184	—	II
的場松太郎	南海洋行 (米穀)	輸出入貿易, 委託販売	10→10	36	39	6.15 (日用雜貨, 直次郎)	273 (青果)	—	200~250	I
古沢丈作	日清醬油(株) 大連工場	製油工場, 特産物商	3→2	164	—	1589.0(大豆油, 粕)	—	—	9500	I
福田顕四郎	満州水産(株) 福田煉瓦工場	水産業, 煉 瓦工場	4,8→ ×,8	136	—	22.5(魚類) 50.0(煉瓦)	50 (煉瓦)	—	—	IV
福井米次郎	大連工材(株)	石材, 工業用材料 商	7→8	83	108	81.0(建材, 土砂) 35.0(貸家) 6.0(石材)	掲載	484	300~380	I
深町賢	中川洋行	精肉商	10→10	36	39	96.0(牛肉)	305	92	150~200	I
小寺壮吉	小寺油房	油房業	3→×	1742	82	947.0 (豆粕, 豆油)	4041	—	—	IV
小島鉦太郎	飯塚工程局, 大連起業倉 庫	土木建築請 負業, 倉庫 業	6,6→ ×,6	208	82	94.75(貸家業) 151(倉庫)	714	158	—	IV
兒島幸吉	大連製氷(株)		6→5	—	—	78.0(米, 建築土 木)300.0(飲料水, サイダー) 40.0(スレート他)	掲載	1062	550~1000	I
古財治八	大連庶民銀行, 金融組合	金融業	6,7→ 6,8	495	—	72.25(貸家業) 大連庶民銀行の記 載	掲載	—	—	IV
後藤長七	後藤商会	海運業	7→7	164	162	165(汽船3社) 420(船舶)	810 (後藤商会)	192	380~450	II
小杉藤六	角田洋行 (角田市郎兵衛)	綿糸布貿易 商	7→×	—	—	246.0(綿布)	—	124	100~150	III
香林静豊	大連被服(株)	被服製造	8→×	—	—	9.0(器具機械間屋)	—	—	—	IV
兒山歌吉	ハリス商会	船舶用途	8→9	31	—	4.25(貸家業) 15.0(食料品用途)	159	—	—	IV
小林ケサオ	(資)小林商会	薬種化粧品 販売	9→×	—	82	58.50(薬)	掲載	94	100~150	I
小西富三	富利洋行	麻袋雜貨	9→×	31	—	—, 38.75(貸家)	—	—	—	IV
小島定吉	小島定吉商 店	セメント石 灰商	9→7	109	162	7.50(セメント) 40.75(貸家)	—	—	—	IV

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
琴坂幸太郎	琴坂商店	貿易商	9→×	—	—	—	—	—	—	IV
小泉専治	小泉商店	化粧品雑貨	10→×	—	—	31.5(小間物, 化粧品)	209	168	150~200	I
小坂安次郎	木村洋行	食料雑貨商 (材木)	10→×	—	—	75.75(日用材木)	—	—	—	IV
槐常蔵	満善堂貿易 部	建築材料及び 貿易商	9→8	—	58	183.0(建築材料) 33.75(貸家)	195	353	250~300	I
遠藤裕太	ソーライト ㈱	塗料製造 (為替仲買)	9→10	59	—	20.0(ソーライト)	掲載	—	—	IV
相生由太郎	福昌公司	請負代理業	2→2	1794	1713	3050.0(土木建築) 150(機械金物) 1305(日用雑貨) 2077.5(貸家業) 145.5(穀類)	12884	6755 (華工)	5700 (華工)	I
有賀定吉	菅原工務所	土木建築, 労力請負	6→×	208	—	625.0(土木建築) 85.5(貸家)	3300 (労力請負)	—	—	IV
秋富久太郎	秋田商会材 木㈱	材木商	6→6	—	—	213.0(木材) 24.75(貸家)	掲載	1144	450~550	I
安西卯三郎	肥塚大連支店	酒類,代理業	7→7	—	—	181.0(酒類)	掲載	311	250~300	I
赤松常吉	浪華洋行	和洋雑貨商	7→7	—	246	181.5(和洋雑貨)	942	1359	1000~2000	I
天野節次郎	満青堂文房 具部	文房具商	7→7	—	162	93.0(文具) 905.75(貸家)	211 (高木)	246	250~300	I
秋元吉平	大連木材㈱	木材販売	8→×	—	—	73.5(秋元商会) 13.0(運送)	掲載	—	—	IV
青木栄之助	内国運輸㈱	海陸運送業	8→×	—	—	215.0(運送)	掲載	—	—	IV
安達惣一郎	北市支店	海産物問屋	10→9	—	47	12.0(漁業)	77	109	80~100	I
斉藤茂一郎	㈱南昌洋行	石炭輸出, 保険代理業	4→6	—	—	99.0(石炭)	掲載	—	—	IV
斉藤久太郎	斉藤油房	油房業	4→×	895	—	632.0(豆油) 8.3(船舶)	369 (貿易商)	—	—	IV
佐藤至誠	佐藤組	石炭,タバコ商	7→7	208	487	355.5(石炭,タバコ) 87.5(貸家)	929	1078	1000~2000	I
坂井慶治	成三洋行	西洋家具商	7→7	164(?)	108	93.0(西洋家具) 96.25(貸家)	389	—	250~300	I
斉藤久次郎	共同組	石炭商,取 引所仲買人	8→×	756	—	354.0(石炭) 30.75(貸家)	612	828	550~1000	I
佐志雅雄	丸二商会	海陸運送業	8→8	136	134	180.0(船舶) 10.25(貸家)	600	854	550~1000	I
佐藤清	佐藤電気㈱	電気機械販 売,工事請負	8→×	—	—	25.0(電気,取付)	66 (円橋)	347 (円橋)	30~50(円橋)	II
沢田治三郎	大塚合名会 社支店	清酒商	8→10	47(?)	39	123.0(酒,みそ)	62	48	30~50	III
沢田賢太	沢田組	酒,米,海 産物問屋	8→7	136	406	147.0(生魚,酒) 115.25(貸家)	432	—	300~380	I
桜井豪	大順公司	請負業	9→×	31	—	25.0(石材,建築) 31.75(貸家)	掲載	—	—	IV
指谷忠蔵	さしや	生魚商	10→9	83	58	106.5(魚)	387	173	450~550	I
坂本治一郎	田崎鉄砲火 薬店	鉄砲火薬商 (中辻)	10→9	59	162	131.25(鉄砲火薬)	329 (中辻)	301	300~380	I
佐野三六	佐野洋行	写真材料商	10→10	31	250 (営業税)	78.0(写真材料)	215	188	200~250	I
菊池吉蔵	大連東和汽 船㈱	海運業	7→6	—	—	89.0 (船舶,後藤長七)	掲載	1696	2400	I
岸胖	岸洋行	金物,船具, 油塗料	8→7	136	326	225.0 (金物,船具)	309	43	450~550	I
金萬計吾	(荻)戸田商会	機械製造, 暖房請負	8→×	—	—	21.0(金物)	掲載	89 (長井)	50~80	I
木村栄三郎	木村屋本店	パン類製造業	9→×	136	134	151.5(菓子)	掲載	250	250~300	I
北川芳洲	北川工務所	電気・ガス・ 工事請負	10→10	31	—	35.0(電気工事)	586	76	30~50	II

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
油谷万次	油谷商店	特産物商	7→8	136	70	270.0(油谷重三) 大豆 22.5(貸家)	—	71	450~550	II
宮崎愿一	宮崎商会	海運業	7→7	—	58	420.0(運送) 70.0(煉瓦) 81.5(貸家)	掲載	373	200~250	III
三村元介	(資)大三商会	海運船舶仲 立業	8→8	—	58	267.7(船舶)	掲載	掲載	250~300	II
宮田太一郎	満州証券信 託(株)	証券信託	8→×	—	—	掲載	—	—	—	IV
宮城豊彦	宮下(資)出張 所	材木, 荒物 商	9→8	47	47	—	掲載	282	200~250	I
三宅如平	三宅洋行	販売業	9→×	—	—	156.0(貸家)	—	—	—	IV
宮伊三郎	進和堂	ふすま製造 販売	10→×	—	—	39.0(指物建具) 19.25(貸家)	—	—	30~50 (宮ハル)	II
宮崎重一	大陸窯業(株)	煉瓦製造業	10→×	—	—	170.0(土管, 瓦)	掲載	—	100~150	II
三枝岩次郎	玉屋	毛織物商	10→×	—	82	55.5(綿, 羅紗)	115 (洋服)	—	100~150 (久一)	I
溝上松次郎	溝上薬舗	薬種商	10→9	36	39	64.5(薬) 20.0(貸家)	108	掲載	80~100	II
峯五郎	峰商会	雑貨商	10→×	31	—	36.0(綿糸, 塗料, 荒物)13.25(貸家)	—	47	30~50 (儀次郎)	II
三上外守男	満州家畜(株)	—	10→×	—	—	—	—	—	—	IV
柴柳新二	柴柳洋行	機械金物商, 工事請負	7→×	—	—	—	33	—	—	IV
清水久六	塩久呉服店	呉服商	8→×	—	—	370.0(呉服) 21.75(貸家)	—	—	—	IV
白石保喜	白石洋行	和洋雑貨商	8→×	109	—	142.5(雑貨) 128.25(貸家)	271 (保七郎)	—	—	IV
白木庄太郎	花の屋	菓子製造	8→×	— (掲載)	—	141.0(菓子) 37.5(貸家)	—	371	250~300	I
篠田利三郎	㊦	株式仲買商	8→8	136	—	45.0(家屋, 土地 証券) 95.25(貸家業)	867	28	—	III
柴田定彦	柴田商会 (大同公司)	醤油, 酒, 米商	9→×	—	—	55.5(米, 酒) 13.75(貸家)	—	—	—	IV
平塚半次郎	龍口銀行	銀行業	3→6	83	—	306.0(銀行)	掲載	—	—	IV
平井大次郎	山葉洋行支 店	楽器, 材木, 家具商	5→×	109	58	390.0(家具, 楽器) 24.25(貸家)	掲載	—	—	III
平松徳市	(株)三星洋行	洋食, 食料 品	7→×	33 (国政)	94 (高井)	219.0(食料品, 国 政)	60 (国政)	301 (国政)	—	II
平田徳次郎	大宮組	石炭, 鑄鉄, コークス商	2→9	109	—	151.5 (石炭, コークス)	562	382	150~200	II
森美文	大連(株) 商品取引所	—	2→3	36	—	—	掲載	掲載 (原田耕一)	—	IV
森上卯平	富来洋行	貿易商	7→7	(掲載)	—	24.7(船舶) 86.0(船舶) 36.0(船舶保険)	掲載	—	—	IV
森谷重八	一ノ瀬商会	欧米雑貨商	7→8	253	82	171.0(呉服) 23.25(貸家業)	753	426	30~50	I
森勝太郎	(株)新宮商行	木材輸出入業	9→9	47	—	—	—	789	450~550	II
千田次郎	満州起業(株)	信託業	8→8	71	—	—	掲載	81	—	III
関五夫	大連運輸(株)	運送業	8→×	—	—	—	—	—	—	IV
菅野茂一	東和公司	貿易商	6→×	31	31	69.0(豆粕)	120	102	150~200	I
鈴木新五郎	南満州倉庫 (株)(志摩洋行)	倉庫業	6→7	— (掲載)	—	180.0(米穀) 195.75(貸家)	515	442	380~450	I
鈴木兼重	鈴木呉服店	呉服商	7→6	(〃)	205	122.5(貸家業)	200	946	550~1000	I
杉山治郎	柴谷(資)支店	酒商	8→9	—	—	82.5(酒, 米)	—	30	—	III

氏名(25年)	商店名	営業科目	1921年 等級(25年)	22年 所得税	26年 戸数割	20年 営業税(1)	25年(D) 営業税(2)	30年(D) 営業税(3)	30年(T) 営業税(4)	盛衰 タイプ
菅 為 蔵	(前)東郷商会	建築材料商	8→×	—	—	—	掲載	35	30~50 (東郷常治)	III
鈴鹿吾三郎	満州清酒(株)	清酒醸造	8→×	59	—	62.0(酒)	掲載	97	80~100	II
須田六四郎	平和銀行支店	銀行業	8→×	—	—	—	掲載	—	—	IV
角田庄蔵	角田庄蔵造 商店	特産物商	9→×	—	—	105.0(大豆,豆粕) 53.75(貸家)	—	—	150~200 (幸次郎)	II
杉本進治	ナワヤ	食料雑貨商	10→×	—	—	22.5(食料雑貨)	—	—	30~50	II
鈴木 致	(株)旅順銀行 支店	銀行業	(7) →×	—	—	掲載あり	—	—	—	IV

(出典) 1921年6月現在の大连商業会議所会員名簿掲載者316人の中から日本国内企業支店長41人をのぞく258人(275社)を抽出。

(石本鎖太郎, 丘襄二, 小島鉦太郎, 古財治八, 今津十郎, 福田顕四郎, 川上賢三, 土橋養一, 大神九八郎, 高田友吉, 田中繁次郎, 玉谷隈吉, 多田勇吉, 野津孝次郎, 山田三平の15人は, それぞれ複数の会社(商店)が会員となる。)・1925年7月時の同会議所会員は247人で, 21年時と共通する営業者は145人。

- (注) (1)「1920年税」……竹内垣道『大連商工名録』1920年7月に掲載されている営業者の営業税額。
(2)「1925年(D)」……『大日本商工録大正15年版』(関東州), 1926年, に掲載。
(3)「1930年(D)」……大日本商工会編『大日本商工録昭和5年版』(渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総鑑(旧植民地篇1)』日本図書センター, 1991年)に掲載。
(4)「1930年(T)」……帝国商工会編『昭和5年版帝国商工録』(名古屋商工会議所図書館所蔵)に掲載されている営業税額凡例にもとづく。
(5)「1922年所得税」は, 交詢社蔵版『大正十二年用日本紳士録』に「1926年戸数割」は, 松坂甫編『満州商工事情並紳士録』にもとづく。
(6) 1920年から1930年にかけての販売高(年商)の動向(盛衰タイプ)についての評価は次の通り。
I……販売高伸長, II……販売高停滞(伸びなやみ), III……販売高減少, IV……閉店・廃業・国内引揚げなどにより, 1930年のデータに掲載されない営業者。
(7)「掲載」は, その商店名が資料に掲載されていることを示す。「—」は, 商店名・人名の記載のないことを示す。

(経済学部教授)